向合ふて居る。此中に常に住んで居る者と云へば私ばかりであつたのだから、空氣は新鮮でなければならぬ筈であるに今言ふた樣な色々汚ない事情の爲めに、如何ほど窓を明流しにしても此二室を常にムーッとした臭氣のない樣にしておけなかつたのである。そこで敷物も幕も悉く部屋の外へ運び出してしまふた。所が果せる哉忽ちにして思ふ如くに新鮮な空氣を滿たせるとが出來た。して見れば倫敦の町では迚も部屋を清潔にしておけないなど言ふのは實に馬鹿らしい囈語である。現に倫敦に在る病院を見るが善い、常に清潔になつてゐるのが幾つもある。

今の風では決して塵を除れぬ

併しながら今日行はれて居る掃除の方法では一つも塵が本當に除れては居ない、又之を除り去ることも出來ぬ。今の遣方では戸も窓も皆閉た儘で唯塵掃をバタ〳〵やるのであるから、約る所部屋の中の此處から其處へ塵の引越をさせて居るに過ぎない。如何いふ譯で皆樣が此樣な利巧な事をなさるのか、私には殆ど其意が解せ兼ぬるのである。若し少しも塵を取除る積でないとならば寧その事之を其儘にして置く方が餘程氣が利いて居る。大工が始めて家を建終た其翌日から翼日之を取毀す時に至るまで、何年の間、何十年の間、塵が悉く此家、此部屋の領分内にマゴついて居つて實際一つも退去せないとは偖々驚いたことである。部屋を清楚に取片付けると言ふのは唯だ一つの品物を最初に在た所から除けて外の處へ移す丈けの事であつて、今度移した處は前の處よりも汚なさが一層甚だしいのである(註を見よ)掃除をする爲め塵拂で拂ふのは額とか紙で拵へた品物の時ばかりは勘辨が出來るが、其他の場合には許せないのである。新鮮の空氣を好む人の悉く蛇蝎視して居る塵を掃除する唯一の法は濡た布で一々に物を拭ふのである。だから一切の道具は皆濡た布で拭いても損じない樣な風に拵へ、又之を濡しても他の品を損じさせない樣善く磨いておかねばならぬ。今日世間で行ふて居る所を見ると、彼は塵を取除けるのでない、固まつた塵を部屋一面へ滿遍に撒くのである。

部屋の塵を去る法

(註)　部屋の中の汚れた椅子や長椅子に濡た雜巾をかけて諸道具

を清潔にするのが好であるなら、之は慥に掃除の一つの方法である。人が毎朝掃除をして「部屋を取片付る」といふて居るのを何年間も見て居つたが、彌よ倍す驚かざるを得ぬのである、偖て其方法といへば斯うである。先づ部屋の椅子、卓子、長椅子などの上に色んな物が載てあつて一夜を過したのであるから、塵や煤煙は此等の品物の上にこそ積つて居るけれども、椅子などは割合に清潔である。然るに愈よ掃除が始まると掃除方は此色んな物を取除けて別の椅子や卓子又は長椅子の上に載せる。然るに此椅子なんかは前の椅子とは違ふて通夜何も載てゐなかつたのであるから、其上の塵や煙煤の夥しいといふたら指で字が書ける位である。だから今此上へ載られた色々な物は其上面こそ可なり清楚であらうが、其下面には汚ない物や塵が滿遍に附着くことは請合である。是で下婢の所作と言つたら實に振つたもので、塵拂子を片手に構へ此武器を以て遠くに在る一切の品物、若くは或る品物を拂ふて塵を驅立てるといふ始末。塵は驚いて四方八方に舞上る、頓て再び室内一面に散布つて有らゆる道具の上に止る、掃除せぬ以前よりも平等に行渡る、これて部屋は「チャンと掃除が出來た」のである。

床の事

床の經營に付て私の知つて居る所では、伯林漆で塗つたのが最も清らかて、毎朝濡雑巾で拭いた上乾いた布で摩ると塵はスッカリ除れる。次には佛蘭西の寄木細工で、是は清潔なことゝ健康に善いとから見れば英國に行はれて居る吸收性の床よりも幾ら優つて居るか知れぬ。然し伯林漆のに比べると多少塵の溜る缺點がある。病室に用ひるには恐く敷物ほど惡い物はあるまい。能も此樣な物を用うことだと驚く位てある。夫でも若し敷物が是非無くてはならぬといふのならば。一年に二度か三度取除けて掃除するのが唯一つ安全の法である。年に僅か一度の掃除で安閑として居る譯には行かぬ。汚れた敷物は眞に部屋の中へ病毒を流すので、論より證據出入する人の足に夥しい有機物を粘りつけて室内へ輸入する、其有機物は敷物に附着いて離れない。此事を考へて見ると敷物が病毒を傳播すると聞いても何も驚くには足らぬ。

紙張、漆灰、ペンキ塗の壁

壁の中で一番惡いのが紙張の壁、其次に惡いのは漆灰の壁である。けれども漆灰は屢々石灰の汁を塗つて其惡い點を治すことが出來る。又紙は屢々張換て其害を防がねばならぬ。蠟をひいて光澤をつけた紙は大に危險を防いでくれる。併乍ら普通寢室に用ゐる紙は、決して用ふべからざる物である。

（註）病人や子供の爲め此樣な空氣が善い彼樣な空氣が惡いと比較し得る樣に五官を慣しこんだ人になると、若し他の事情が同じてあるならば、古いペンキ塗の部屋に在る空氣と古い紙張の部屋に在る空氣とを目を閉ぢながら臭分けられる。古い紙張の部屋に在る空氣は窓が盡く開けてある時でも常に微臭い。

風通と清潔との間には親密な關係があるといふ事は今述べた所に由て解るであらう。通例の輕い紙は煙突に「アルノット」通風器の備へがしてあると餘程長く清潔で居る。今日世に用ひられて居る壁の中で一番善いのはペンキ塗のである。此であると縱ひ動物質が着いても洗ひ落される。

（註）汚れた戸又は汚れた壁の上に木の釘を打て清らかな衣服や肩掛を懸ける人があるが是は丁度清い物で汚れた壁や戸を拭くのと同じ事であるから廢にするが善い。併し若し御好とあらば慥かに寢部屋の戸や壁を掃除する便法である。而して大抵の人が知らず識らず之を行ふて居る。が概して言へば世には掃除嫌いの人が多いから、此より外に掃除の機會があるまい。

病室に至極善い壁

此動物質といふのが部屋を黴臭くする物である。

病院に於ても私宅に於ても病人の室に用ひる壁として最も善いのは純白で吸收性のない「セメント」か又は硝子を用ひるのである。又釉藥をかけた瓦も美しく出來ることなら此も宜い。

水を汚すのと同じで、空氣も亦汚すとが出來る。今試に水の中へ息を吹入れると水は汚れる。其譯は息の中に含んでゐる動物質が水に混るからである。空氣も矢張其通りで、動物の息に含んだ汚物が壁や敷物に澤山附着いて居ると其部屋の中の空氣は常に

汚れて居る。

左すれば部屋でも寢室でも清潔といふ事が粗略にならぬ樣に注意せねばならぬが、其粗略になる點は次の三つに約められる。

第一、外部から來る汚れた空氣

家の外から來る穢ない空氣、是は下水渠から發する惡氣、不潔な町々から蒸しあがる蒸氣、煙、まだ十分燒けてない薪炭の糟、藁の屑、馬糞などで汚れて居る。

家に最も善い壁

模樣のない瓦や釉藥をかけた模樣入の瓦は壁に嵌强の材料で、之で家の外側を掩ふとにすれば、光線の爲から言ふても清潔にする點に就ても溫熱を保つ上からでも其利益は謂ふに謂れぬ程である。從て又結局經濟の上に如何程の得になるか知れぬ。若し汚るならば消防喞筒で水を噴かければ家の外面は清楚にサッパリと洗へる。市町の衞生の爲に石や煉瓦などを道路に鋪くのは最も大切であるが、之に次で必要なのは此樣にして壁を作ることであらう。

第二、內部に生ずる汚れし空氣

家の中からも汚れた空氣が來る、之を汚す者は第一塵埃である、此塵埃を皆樣は始終彼方此方と引越させて居るが決してスッカリと取除けはせぬ。是で考へると第一番に必要な事は何であるかゝ思ひ出せるであらう。先づ第一番部屋や病室の中には成るべく棚を少なく拵へることが肝要である。又如何理窟があつても棚といふ棚は盡く外面へ現はさぬ樣にしなければならぬ。棚が露出になつて居ると塵埃の宿になつて仕舞ふ、溜つた塵埃は誰も拭ひ取る者がない、是では室內の空氣が汚れるのも固より當然である。且又室內に楯籠る人間が我も我もと日夜口から惡い氣を吐き出して諸道具に穢ない物を附着つける。若し適當な方法を以て諸道具を清潔にせなければ、部屋や病室が黴臭くて何とも致方が無くなる。此樣な始末であつては如何に四方八方を開廣げて空氣を通はせたとて到底部屋が清潔にならう道理がない。縱箇樣な事がないとしても外に又空氣を絕えず惡くするものがある。磨いて光澤のある品物や釉藥のかゝつた品物を除けたら總ての品物は

皆空氣を汚す。例へば綠色に染た紙は砒石が使ふてある。其處で此樣な綠紙を貼たり掛てある部屋の中には砒石の微分子が飛散て居る。小さな塵を分析しても砒石が明晰と見出されたのである（砒石即ち砒素は猛毒の原素である）左すれば部屋の塵埃は害毒がない所か、大ありてあることが解らう。然かるに皆樣は此毒な塵埃を幾月の間も棚の上に屯させ幾年の間も部屋の中に止めて置くとは何たる心であらうか。

此外煖室爐に焚く火も亦石炭の塵埃を部屋の中に充たす。

第三、敷物から來る汚れた空氣

汚れた空氣は又敷物からも出來る。敷物に就て特に注意すべきは來訪の客が足に附着けて來た動物質の汚物を其上に御土產に殘して置くから、此樣な物を長く逗留させない樣にする必要がある。床板も亦た其木理を塞いで且つ磨かねば同樣に有害である。學校の教場や病室の床から惡い臭氣が來るのは澤山其に粘着いて居る有機質が濕氣につれて蒸上がるからである。左らば之を嗅げば甚だしい害あるといふ事は十分悟れるであらう。

害を避ける法

其處で家の內外ともに空氣を清淨にせねばならぬが、外部に在る空氣は衞生の設備を改良するのと煙を滅絕すのとで之を清らかにするより外に道がない。若し此改良だけでも出來たなら、石鹼を儉約するのみでも其利益が如何程大なるか知れぬ。

家の內部に在る空氣は上に述た種々の方法に十二分の注意を加へて始めて清らかにして置ける。即ち壁、敷物、諸道具、棚なんかの有機質と塵埃とを取除るのである。其塵埃といふのが既に澤山な有機質から出來て居るのである。室內に在る所有品々には盡く此塵埃と有機質とが浸込んで居る。部屋を黴臭くするのは實に此二つの害物に外ならんのである。

清潔にせねば我々は幾ら風通しを善しても十分の効能を見ることは出來ぬ。左りとて又風通しが惡ければ所詮十分に清潔にすることは望まれぬ。

如何いふ階級の人であつても、病人の部屋は清潔の上にも清潔にせねばならぬといふ

事を聊たりとも考へて居る人は誠に稀である。其證據には是迄段々說述べた色々の事は病院にこそ多少行はれて居るけれども、個人の家に在る病室では一向に行はれて居らぬ。宜しく個人の家で多く之を勵行せねばならぬ。何故といふに其煙筒は煙煤だらけである。家具萬端は塵まぶれである。便器は一日に一度しか棄てないのである。だから極立派な家へ行て見ても病室の空氣を絶えず穢なくして居るのが屢見受らるゝ。壯健な人にはドウも妙な惡い癖がある。といふのは自分には左して不便利と思はぬ事で十分辛抱が出來るとしても、病人に取ては不便どころか苦みであり、縱し死目に急がせないまでも病氣本復の邪魔になる場合が往々ある。然るに壯健な人はスッカリ此事を忘れて居る。身體の丈夫な人は長くとも八時間以上同じ部屋に止まるとは滅多に有るまい。縱ひ三分間か五分間でも始終何か趣きの變つた事をすることが出來る。假に八時間追通しに一室に居るとしても、其間に身體の姿勢を變ることもできれば此處から彼處へ居所を移すこともできる。併し乍ら病體の人は左樣は行かぬ。臥床を離れられぬ者は尙更の事である。自から身體を動かして空氣や光線や溫度を變へることは到底六ヶ敷い。落着て居ることも出來なければ煙や臭氣や塵埃を避けることも思の如くにならぬ。であるから壯健な者には極めて瑣細な事でも病人は之が爲め毒を受けたり欝悶することになる。

「治し樣のない事は我慢せねばならぬ」とは看護婦に取て惡い格言である。凡そ此言草ほど惡くて危險な者はあるまい。看護婦でない人はイザ知らず、苟も此職に在る者が致方のない事を辛抱して諦めるといふのは不注意千萬、薄情千萬な事である。己自身に對しては卑劣て自から賤むといふもの、預つた病人に對しては罪が深いといふものである。

第十一章　身體を清潔にする事

殆んど總ての病は之に罹ると皮膚の機能が幾らか亂されるものであるが、又極めて重

皮膚から受ける毒

大な病になると造化自然の妙用で殆んど全く皮膚の作用に由て輕快になる、是は子供が病氣になつた時殊に多く見る所である。併しながら毛孔から惡い排泄物が噴出て皮膚の上に着くから、若し入浴したり夜服を着換へなければ留まつた儘に堆積るのである。渾て看護婦たる者は絕へず此事を胸に留めて居らねばならぬ。何故かといふに病人の身體から汗が湧出る斗でない其外有害な有機質が噴きてて皮膚を汚したり衣服に附着くから、病人を入浴させずにおいたり長く同じ衣服を着た儘にさせて置かうものなら、あたら造化自然の作用で健康に趣かうとして居るものに要ぬ邪魔をして之を妨げるのである。其害は恰ど毎日少し宛病人に毒を呑まして居るのと同じ事である。皮膚から毒を受さすのと口から毒を飲ませるのと其効力は同じ事顯然である。唯だ口から飲ませるよりも少く結果が遲いまでのことである。

通風も皮膚の清潔も等く必要

注意て皮膚を洗ひ善く之れを乾かしてやると其後で病人の心持の善さ、氣分の樂さといふものは存外である。是は通例病床に侍て看護した者の目に付く事である。併しながら唯だ心持が善くなる氣分が樂になるといふ許の効能に過ぎぬと思ふてはならぬ。精神が爽になるといふのは即ち今まで活力を壓へ付けて居た物が無くなつて再びその盛になつた證據に外ならぬのである。詰り氣持が善いと思ふだけ病氣が癒つて來たのである。されば看護婦と謂はるゝ者は此處に着眼せねばならぬ。入浴ぐらゐさせたからとて大して病氣が輕くなるでなし、其當座一寸氣分が善い迄の事、其樣な事は後にしてもよいなんぞと勝手なことを云ふて病人の身體を清らかにすることを等閑にしてはならぬ。

善く整頓した病院と謂はれる所ては何れも此點に注意せなければならぬ筈で、一般に先づ其通りになつて居る。併しながら個人の家で養生して居る病人に至ては大概此邊に注意せられてをらぬ。

病人の周圍に在る空氣は屢ば入換て新鮮にし、自由自在に風を通して肺や毛孔から吐出す有害有毒の惡氣を戸外へ放逐するのが肝要である如く丁度之と同じ事で始終毛孔

を拭ひ開いて排泄物を止めぬ樣にするのも專一の務である。空氣を室内に通はせるのも皮膚を清潔にするのも其目的は略同じ事で、即ち身體から排き出す毒な物を成るだけ速に取除けて身邊に止めないのが趣意である。

海綿で擦つたり湯で洗ふたりして皮膚を清らかにする時にも注意を加へるべき事がある。即ち一度に餘り多く皮膚を露出させない事である。若し露出方が多い時は汗の出るのを妨げる。汗を妨げて出させないと形こそ換れ更に外の害を生ずるのである。

病人の身體を洗ふには種々の仕方があるが夫は今爰に細かく述べる必要はないと思ふ。殊に如何いふ法を用ふるべきかは醫者が指圖をする筈であるから、尙更私の喋々を要せぬ。

種々樣々の下痢や赤痢などの場合には皮膚が硬く且つ粗糙になる。此の如き時には軟かな石鹼を澤山用ひて洗ふてやる。其心持の善さといふものは何とも言はれぬ程である。其他の場合には先づ微溫かな湯と石鹼とで海綿を用ひて洗ふてやる、夫が濟むと

再び微溫かな湯で善く洗ふて後溫かい手巾で拭ひ乾かすのが善からう。

何の看護婦も晝の間は幾度も自分の手を洗ふ樣に注意すべきである。顏も亦洗へば尙更善い。

清潔にすると云ふ事だけに就て次に一言して置く。

皮膚を熱して擦ること

石鹼を用ひずして冷たい水で洗ふたのと、石鹼を用ひて溫かな水で洗ふたのと洗ひ終つた後に其水が何程汚れて居るか調べて見るがよい。石鹼を用ひなかつた冷たい水は餘り汚れて居ないから、身體の垢が一向去れてゐない證據である。次に石鹼を用ひた時の冷たい水は些と濁り方が甚いから、大分垢が落た徵である。最後に石鹼を使ふた溫かな水は餘程穢ないから、垢も餘程洗へたことが解る。併し今少し試驗法を改めて、一分か二分程の間熱い湯の上へ手を差出して其湯氣にあて次には唯だ指尖ばかりで其上を擦つて見る。すると垢が紙撚の形になつて撚出されて來る。此から考へると蒸氣で蒸して垢を

擦り取るのが一番で、恰ど全身を包んで居る垢の皮をクルリと剝いた様な者である。約る所私は唯だ水で洗ふたり海綿で擦つたりするばかりで本當に身體の皮膚が清らかになるものでないと言ふのである。宜く目の粗い手巾を取て其一隅を極熱い湯につけ、其處へ少し許酒精を加へたら一入効能があるであらう。而して指で手巾を持て皮膚の中へ擦込んばかりに擦りつけるが善い。箇樣にすれば薄黑い色の垢の紙撚が陸續と出て來る。此から考へると他の洗方では如何程惜氣なく石鹼と水とを使ふたとても到底十分清らかに成て居なかつたことが知れる。此垢の紙撚は是非取除けなければならぬ物である。夫だから自分の身體を常々清潔にして置かうと思へば、浴槽、石鹼、海綿などを全く備へ付けて何一つ不足ない樣にしたからとて、今話した樣に擦りを掛けねば割合に其詮が無い。湯を入れる鉢と目の粗い手巾と擦りつける手と指とがあれば澤山である。斯うして身體一面に磨をかけたら垢の落ること煮卵の殼を剝くが如くである。誰でも身體の汚れるのは止を得ないなんかと言ふのは寢言同樣の言分である。患者が長の航海中に水の一ぱい入つて居る鉢も無く又寢所から出られなんだにも係らず今述べた法を用ひて恰も我家の便利な品々を取揃へて置いたのと同じく身を清らかにして居つた例は幾つもある。

併しながら湯の分量が十分澤山にあつて之で身體を洗ふ時は唯だ清潔にする效能ばかりでなく全く違ふた結果がある。何故といふと皮膚が水を吸收するから一層柔らかくなつて發汗し易くなる。だから水を潤澤にして石鹼で洗ふのは清潔にするといふ上から見ないても望ましい事である。

第十二章　喋々しき希望と忠告

病人への忠告

病人に向ふてテウ〳〵忠告をする者がある。病人をして遠慮なく言はしめば次の樣に答へるであらう。

『私に忠告して下さる方、箇樣な人は仲々夥しい者でございます。男であれ女であれ大

人も子供も皆特に私へ忠告を強賣する權利を持て生れた樣に考へて居られるらしい。何故私が此樣に誰からでも忠告を受けねばならぬか、此點こそ私は知り度いと思ふのです。して私は御深切の方々に斯樣に申し上たいのです。來る人訪ふ人思ひ〳〵に色々な事を御忠告なさいまして、一々其仰に從はうものなら英國の內外を問はず天下中有と有ゆる場所へ行かなければなりません。又御勸下さる運動も其種類は千差萬別で、ソレ馬車が善い、ソレ汽車が善い、鞦韆をしたら如何、啞鈴體操をしたら如何、モウ實に種々なる名案が出ることです。藥に就ての御心添も矢張中々の御念入で、神代以來發明になつた有りと有らゆる刺戟劑の能書を御並下さつて一々之を飲めといふ御注文でございます。而も三人五人の國手が揃ひも揃ふて皆今は些とも旅行の出來る時でないとのお話であるのに右の樣な御容喙とくるのですから堪りません。長の月日診察をなさつたのは此御醫者樣方、從つて私の事を一番善く御承知であるべき人も此方々です。斯る專門家が運動などとは存じも寄らぬ事だと御禁止なされ、食物は是々、飲料

は斯々と細かしう御極下さいましたものを、之に背いて何と致しましよう。幸か不幸か忠告なされる諸君が御醫者でないから失敬ながら一々從へませんが、若し此方々が私を診察した御醫者樣であつたなら、病人たる私が其仰に背いて不圖或る一人の忠告に從ふ樣な事をした時には此方々は何と仰しやる事でしやうか。一體此倫敦の人には實に奇妙な事があります。といふのは外の人々も丁度自分と同じ樣に喋々と忠告をして居るといふ事に氣が付きさうなものであるのに、夫には少も心付かず、忠告をするのは自分のみであると思ふ人ばかりである。是はドウも奇態です。何しろ餘り世話を燒て呉れる人が多いので私は全く正當防禦の爲め「一切關係が出來ません」と言ふより外は無いのです』。

喋々しき希望は病人の害

「喋々しき希望」とは隨分變な標題と見へるかも知れぬ。けれども患者の友人等が到底病氣を療す効能のない事を喋々と述べて希望の意を通ずるのは、病人に取て非常な煩累で、此ほど堪へ惡い事は他に無からうかと私

は固く信ずる。凡そ箇様な馬鹿な希望を病人に通ずる程詰らぬ事はない。私も長年月の間自から實地に廣く經驗して其弊害を知て居るから尙以て大に反對するのである。他人の病氣の時にも又私自から病氣に罹つた時にも屢ば其手を食ふて懲て居るから何處迄も其害を認めて居る。そこで私は患者の朋友なり見舞人なり或は附添人なりが危篤の容態を何でもない樣に言ふたり實も知つた顏に療りさうな口振をして病人を喜ばせて見ようとする惡い習慣を棄てゝ貰いたい。是は私が最も熱心に祈る所である。以前よりも現今は醫者が本當に自分の容態を聞きたがつて居る病人には虛言僞のない所を餘程聞かせる風になつて居る。

して見ると病人の友人等が喋々と嬉しがらせに大患を極手輕く言ふのは餘程念の入た戯けではあるまいか。主任の醫師は定めて幾年間も引續いて細かしく診察して來たのであらう。聽診器は無論用ひたに違ひない。脈搏も調べ舌なんぞも丁寧に檢査したに違ひない。干渉好の朋友等が素人眼で見たより遙に明るい眼で觀察したのは極つて居る。此通り手を盡し心を盡した上で斯樣々々にするが宜いといふ意見を述べたのである。少しでも診察の助けとなるべき手段は盡く用ひた後正しい鐵案を下したのである。

然るに斯る喋々連中は其身縱ひ醫者を業とする者であつても、邂逅の見舞に一寸見た計で主任醫の意見を誹して病人に自分の意見を用ひさせ樣とするのは何と淺墓な考ではあるまいか。

不圖出來心で久し振に見舞に來た友人なんかの意見は其實意見といふ程でもないが、此樣な人物が御世事半分喜ばせ半分に出放題を並べて、十分の經驗ある醫師と全く違ふた意見を吐いた所で、如何して病人を喜ばすことが出來よう。病人が些と狂ふて居ればイザ知らず、若し常識のある者ならば恐くは其樣な便ない說を聞て嬉しがる氣遣はない。猿も木から落る譬諭の如く主任醫の說だからと云ふて間違がないとは請合はれん。實際名醫にも間違は度々ある。然し黑人と素人と何らに間違がありさうなかは問ふまでもない。

病人は我事の話を好まず

今言ふた友人等は固より惡氣があつて病人に喋々するのでない、全く親切な心からである。だが實に病人に厭と思はせる。實を言へば病人は決して此樣な人の忠告を聞いて喜ぶものでない。却て壓下けられた樣な心持になつて疲れてしまふ。有像無像の人物が腹を合せた樣に陸續と詰掛て彼が善いの此が善いのと勸めるならば、病人は誠に其煩はしきに堪えない。病人は何故自分は彼の人々の勸める所と考が違ふのであるか、何處が自分は惡いのであるか、友人等の知らない如何いふ徵候が有るのか。其樣な事を考へて居ると、喜びどころか却て疲れて來る。其上我身上話になるから注意は外を向かずに自分ばかりに向てくる。概して言へば本當に病氣である患者は自分の身上に係つた話をすることを好まないものである。鬱憂病の患者になると却て身の上話をする。併し前にも言ふた通り私は此處には鬱憂病人の事を言ふて居るのでない。眞成に病のある患者に就て言ふて居るのである。

（註）醫師又は經驗のある看護婦が、ビク〳〵心配して苦しんでゐる病婦に向ふて「貴方のは何も大した事でありません」とか「ナニ二三時間の苦痛で決して心配なさる事はありません」などと請合ふて非常に病人に元氣をつける場合がある。始めて產をする場合などがさうである。是は私が今本文の中に云ふたのとは全く譯が違ふて、經驗を積だ者が少も經驗のない者に與へる忠告である。之に反し本文で言ふた忠告は經驗のない者が苦い經驗を積だ病人に與へる忠告で、盲人が眼明に道を敎へる樣なものである。其であるから詰り「何處かに何人かが熱病を煩ふて全快したのを誰かが知て居るから貴方の肺病も全快することと思ふ」といふ樣な話に過ぎぬ。

私は斯いふ事を聞いた。或る醫師は其預つて居た病人が遂に全快せなんだ爲めに非難を受けた。何故であるかといふと他の醫者が預つて居た或る病人が全快したのに此醫者の患者が癒らなんだからだといふのである。然るに他所の醫師に賴つてゐた病人といふのは今死んだ病人とは男女の違がある、年齡が違ふて居る、病症

も違ふて居れば場所も亦違ふて居つた。こんな比較をされては如何なる名醫も堪へたものでは無い。併し是は實際有つた事である。此樣に比較にならぬ二つの場合を比べる樣な人物は餘程の愚物である。箇樣な比較をするには極めて綿密な注意が要るといふ事を知らぬのて(又知らうともせぬのである)畢竟注意が足らぬからソンナ何の價値もない比較をするのである。若し大に注意が要ることを知つたなら醫者が善いの惡いのと減ず口を敲かないであらう。一つの病院の死亡者と他の病院の死亡者とを比べて統計表を拵へても、總ての患者の年齢も男女の區別も病氣の種類も頓着なしに拵へた統計表であつたら何の價値も無いものである。是は固より論ずる迄もない事であるが、水腫を煩ふて居る男の老人と肺病に罹て居る若い女とは比較の出來るものか出來ないものか大概解り切つた話ではないか。然るに最も利發な男や女が度々今の樣な奇妙な比較をすることが珍しく無い。男女の差別、年齢、病症、場所の相違、其外比較に必要な事柄は一切算用の内に入れずにやるのであるから溜つたものでは無い。

病人の爲めに爲す馬鹿な慰藉

又見舞人が頻に馬鹿な慰言を言ふので病人は其煩に堪えず、何卒一時も早く我身に係る話を廢せたいと思ふて「アー」とか「ウン」とかばかり言ふことがある。此の如き時には同情が無いので病人は非常に憂鬱する。朋友の取卷て居る眞中で孤立になつて居る樣な心持がする。來る者來る者異口同音に馬鹿な希望を述べたり奬勵をしたりして包圍攻擊をやる。病人の身にすれば只の一人でもよいから何卒其樣な聞辛い事を言はず簡單に打明て話される人が欲いのである。「何卒神の御心によりて今二十年貴方を生きさせたい」であるはの、「イヤ貴方は前途長らく活潑に御存命である」のと口癖の樣に言はない人で我が欲する所願ふ所を話される人が欲いのである。斯樣な人が一人でも有つたらば如何程嬉しいか知れぬ。幾らチヤラホラ寢言交りの御世辭を並べても、病人は自から所詮助からないのを知て居る。人の傳記や醫學雜誌に書てあるのを讀むと「誰某は長らく病氣であつた末到頭死んだが聊か

思掛ない事で有た」とか、「他人も思掛ねば自分も思ひ掛ぬ所であつた」なんか書てゝるのを屢ば見るが、如何樣他人は見て居らなかつたから思掛なく思ふたかも知れぬけれども、病人自身は決して思掛なかつたのでない、豫々善く思掛て居たのであると信ずるべき理由がある。本人自からは命の旣に旦夕に逼つてをるのを悟つて居たと思ふべき理由がある。併し本人は其存命中我が悟つて居る事を友人等に縷々と說明しても所詮無益だと思ふたのである。

今私が言ふたのは病の起つてから間も無く死ぬる樣な急性の病人に關した事では無い。又神經病に罹つた病人に就て言ふたのでもない。

急性の病は何分にも突然に來るのであるから、病人は自分の生命の危ふいのに心を寄せる隙が無い。小說又は傳記などには話を面白くする必要があるから、死際の模樣を寫出すに「臨終の際に至るまで精神慥に智慮の明かで恰も天使の如くであつた」など普通に書いてある。が私も大分病人の臨終を見たのに、目を閉ぢ呼吸を引取る迄精神が

確實であるといふことは甚だ稀である、否、決して無いと思ふ。尤も多少精神の働はあつて身體の苦痛を感じたり自分の行ひたいと思ふ義務を氣にすることはあつても、其外の事については全く無頓着なのが九分通りである。

神經に關係した病人は又之と趣が違ふて、有りもせぬ危險な模樣を已が心に畫いたり或は他人に語つて喜んで居る。

併し乍ら慢性の病氣で長年に亘つた患者は自分の容態が如何であるか十分善く知拔いて居る。生涯再び社會に出て活動するとの出來ぬとは豫々醫師から聞いて知つてゐる。先月自分に出來た事も今月は出來ぬ樣になり、今月出來る事も來月は打棄ねばならず、一月々々力が衰へて來ると承知して居る。此の如き患者には程のよい事を言ふて嬉しがらせを爲ぬが宜い。此樣な事を喋り立てゝ病人が如何程煩はしがるか草臥るか、喋る人には一向氣が付ぬけれども斯ういう眞個の病人は自分の事に就て話しするのを辛く思ふて辛抱が出來ない。剡して、長命だの全快だのと所詮望のない事を述立てら

れては辛抱が出來る筈が無い。

左樣いふ病人に忠告の押賣をして、是々の仕事は御廢なさいの、云々の醫者に換て御覽なさいの、イヤ家を換るが善い、轉地をするが善い、箇樣々々の丸藥に散藥或は特効藥を試て御見なさいなどと資本入らずの出放題を惜氣もなく潑せかけるのは、其不理窟なること固より論を俟たぬ。何故かといふに此樣な忠告家に限つて譯の解らぬ事を病人に勸める。『醫者といふ者は必らず見立違をするに極つて居る』から唯今の醫者の見立を御信じなさるな。所が何々博士の御見立は何時も正しうございますから此先生に賴つて其說を御信じなさいと云ふ。醫者が皆見立違をするのなら何々博士も其連中に入て居る筈ではないか。不理窟とは此處の事である。且又此類の忠告家は病人に其仕事を廢すが善いと勸めながら新らしい仕事を勸める連中である。

忠告者の亂暴な臆斷

病人の朋友（其の中には醫者を業とする者もあらうし然でないのもあらう）が其病體で實行ができるか否か、差支がないか否かを碌に知りもせずに、俄に飛で來て斯樣々々の事を爲さるが善いと藪から棒を突だして煩ひを

ることがある。其顏付を見ると如何にも得意然として居るが、如何にせん、到底病人には左樣な事は出來ぬのである。例へば人の足を折て居るのも知らずして運動を勸める類である。若し箇樣に勸める友人が主任の醫師であつて、病人が其言葉に背き飛入の人の勸めに從ふたならば、その醫師は果して何と言ふのであらうか。然るに世の人は決して此邊の事を考へぬのである。

忠告する人は二百年の昔も今も同じ事

むかし有名な人が一大事を起さうと決心して、將に之を實行しようとする前六個月の間有らゆる知人が來て續々同じ樣な忠告を潑せ掛け、之を止させ樣としたさうである。そこで此人の言ふて居る事には、此樣な輩には何時も同じ返答をするのが一番面倒が無いと思ふた。即ち此樣な決心をするのには豫め十分に考へてからの事であるから惡からず思ふて吳と言ふたのであると。患者が若し幾年の間か有らゆる朋友、有らゆる知人から手紙又は直接の言葉を以て丁

度之と同じ様な厄介な忠告を毎日々々受けづめにして苦痛を辛抱するならば、私は此著名の人と同じ返答をなさいと勸たいと思ふ。此世話好の朋友や知人は些と考へて見るが善い。病人は定めて今日まで少くとも五六十回は自分のに似た忠告を聞いたであらうし、聞いて若し行へる事なら遠の昔に行ふたであらう。左すれば自分が今出しや張ても別に役に立つまいと。若しチョットでも此理屈を考へたら、些と病人に對して馬鹿な世話を燒かぬ様になるであらう。けれども一般の人には此様に思案を運らす機會が無いらしう思はれる。世の中の人は箇様な事に就て今日も尙ほ二三百年の昔と同じ考を持て少しも進歩して居ないとは、實に奇妙な事である。

右様の病人が段々衰弱して死期に近づく時往々見る事は、止を得ざる天命と諦らめて心を快活にし、誠心誠意を以て忠實に其本分の義務を守り、死に至るまで變ることなく喜んで靈魂を天座に返すことである。然るに物識ずの戯け者が柄にもない忠告を强賣してアタラ安心を極て居る者の心を攪亂し、憐れ箇の白圭に微瑕をつける様な事をする。思ふて此に到ると私は南面して日光に向ひ美しい果實が枝々に垂下る花園の壁に蝸牛の殘した粘泥を見る心地がする。

忠告して病人を愚弄す

忠告を病人に潑せかけるのは人を愚弄するといふものである。固より愚弄に信實なのがある筈は無いけれども、凡そ此程不信實の甚だしい愚弄もあるまい。同じことを繰返すではないが、患者の實際の病狀を微塵も穿鑿せずして忠告がましい事を喋べくるのは毛頭も病氣に益せぬのである。何故なれば此忠告家は病人の容態に就て本當の處を知りたいのが目的でなく、縱ひ病人が何と說明しても何と辯解しても之を利用して自分の議論を滔々と說述べ、結局己の意見に從はせようとするのが目的であるからである。所で此忠告家の曰くには『併し其様な事を穿鑿するのは差出がましうて無禮であらう』と。如何にも其通りである。が病人の實狀を少しも知らずに得手勝手な忠告を與へ且つ穿鑿の出來ぬことを自ら認めて居るといふのは、是よりも幾ら失禮であるか知れぬのである。

此處で私は看護婦方に忠告したいのは今言ふた樣な人物は皆樣の預つて居る患者に害を與へる見舞人である。若し病人に向ふて『貴方は何も是ぞと心配する事はありませぬ。些心をイソ〳〵持つのが宜しうございます』とか『貴方の樣では自殺を企てゝ居るのと同じ事、用心なさらねばなりませぬ』とか『誰かゞ何かの目的に貴方を利用するので、全く其道具になつて居るのである』とか『誰の言ふ事にも貴方は耳を御止なさらない。頑固にも自分の思ふ一方に執着なさる』とか『貴方は義務といふ事に心を御注ぎなさらねばならぬ。今の樣では天道の御指圖に逆ふて居なさる』なんぞ言ふ見舞人があつたら、病人は既に此人から有ゆる害を受けんとして居ると心得るが善い。患者が病氣の爲め如何程苦んで居るか、是は壯健な者の一向知らない所、了解せない所である。壯健な者は苦痛を受けるのを何でもない事と思ふから、病人の身になつて其苦さを推量することが出來ぬ。

病人に快樂を與へる法

病人の身邊に侍つて看護する人でも、或は病人を見舞に行く人でも、病人を樂しませる工夫をせなければならぬ。又如何すれば心が樂しくなるかを病人に話し聞かすべきことと思はねばならぬ。見舞人のある時に病人が愛想をする積りで苦さを耐え色々考へたり思ひ出したりして全く話を受持たねばならぬ場合が屢ばある。是は見舞人が間抜で居るからで、己は見舞に來て居ながら自分の心配事に思を取られ病人を慰めもせず面白い事を話しもせず茫然として惚け面をしてゐる。此樣な見舞なら爲て貰はぬ方が却て善い。而して左樣な見舞人は他の人に後から『オヤ〳〵、私は考へる事が澤山にあつたものですから、コロリと彼事を病人に言ふのを忘れました。必定病人は彼事を聞きたかつたでしやう』などと云ふのである。此樣な風では病人が如何して之を聞くことが出來るものか。此樣な事を言ふ樣な人物は決して『考へる事』など有て居る者ではない。却て考へる事が山ほど有て事務に鞅掌して居る人の中には病人に話す事も澤山に有て居るものが少くない。

私は見舞人が自分の心配を病人に語つてならぬと言ふのではない。之を語るが病人に

も善し又自分の爲めにも善いことと信ずる。併し乍ら若し自分の懸念する事柄を聞かせるなら、亦た愉快な事をも聞かせるべきであると言ふ事を忘れてはならぬ。

一體病人は物事の都合よく運んだといふ善い噂を聞くのを喜ぶのである。例へば何君と何嬢との間に長く緣談の話があつたが到頭其通りに成つて芽出度く華燭の式を擧げることになつたなんと云ふ樣な話は大に病人の聞いて樂しむ所である。勿論誰と、誰と結婚致したといふ丈でも善ささうであるけれども、唯だそれ丈けで道行の一伍一什を話さないと、話に光澤が無くても餘面白くないから病人の快味は半分減てしまふ。此計ならば尙善いが、十人に九人までは誰と誰との緣談は其結果滅茶〳〵になつて仕舞たなどいふ類の事を病人に聞かせる人が多い。是ては病人に不愉快を與へるのである。

病人は又實際利益となる善い話、即ち正義の人や正義の事業が勝を占めて成功したのを聞くが非常に好なものである。書物だの小說だの或は六かしい原理、訓誡、學說なんかいふ物は、病人が壯健な頃に鱈腹讀んで食傷して居るからモウ食べたくない。御爲ごかしの忠告は少くとも五十度や六十度押付られてモウ胸膨れがして居る。此樣な乾燥無味な講釋や雲をつかむ樣な事をやめてその代りに實際上甘く成功した慈善的の話を一つでも聞かせるが善い。之を一つ聞かせたら病人に一日の健康を與へる樣なものである。

（註）小さい飼鳥や獸は病人の爲め屢ば至極善い友達になる。久しく慢性の病を煩ふて居る者には最も然りである。からして何年間か同じ部屋に閉籠つて居る患者は時として籠に入れてある可愛らしい鳥を弄んで唯一の樂とすることがある。若し病人の手で自から此鳥などに餌を食はせ或は掃除してやれたら、何時も之を奬勵して爲すが宜い。

段々病氣が重くなると患者は物事を考へる力は減なくても物事を行ふ力が乏しい。だから自分も有益な事に手を出さうと思ふても最早思ふに任せない。此の如き時は簡樸

な有益の事業の有つた噂を聞くのが責てもの樂で、如何程之を聞たがるか壯健な人の考へ及ばざる所である。

病人の事に就て今上に述た事々を注意するが善い。病人はその生涯が實に望のない不完全なものであるといふことを苦にするから、これを推量してやらねばならぬ。言ふに言はれぬ悲しい思で失望しながら臥床に就て居つて。死ぬるまで此苦を助かる道がないのである。左らば如何すれば十分の樂を與へられるか。假令ひ十分の樂はさせられなくとも責て一時間たりとも色々に趣味を變て鬱散をさせてやる法を考へることを忘れてはならぬ。

病人の前で御氣の毒だといふて泣顏をしたり涙聲をするのは當人の好まぬ所である。當人は却て傍に居る人や見舞ふ人に元氣よく活潑に面白さうにして貰たいのである。腑拔の樣に茫然として居のは病人の見るに堪えぬ事であるから慎むが善い。懇々の忠告や說敎は縱ひ如何なる人の口から出ても病人は之を聞いて草臥てしまふ。

赤ん坊と病人とを互に遊ばせるのは至極妙で是ほど善い相手はない。併し如何かすると病人も子供も困る場合が出來るから、無論側に居る人が舵を取て何方も困らぬ樣にして行かねばならぬ。或は病室內の空氣が赤ん坊に惡いと思ふ人もあらうが、赤ん坊に惡ければ病人にも惡い筈である。病人に差支なければ赤ん坊を連てきても差支ない筈ではないか。若し果して惡くば早速之を善くして兩方の差支ない趣向にするべしである。天眞爛漫たる赤ん坊を見るのは病人の心の有樣を全く一洗して快活にする。それで極まだ齡の行かぬ子供は、若し甘やかされた結果增長して居ない者ならば、大概病人の氣に入る樣感心に甘く待ふて行くものである。併し病人と遊ばせる時間が餘り長いと双方草臥るから好加減に切上るがよい。

病人は相當の原因より不相當な苦痛を覺えるものである。者し此譯が分つたらば其の悲み傷む心を慰める爲め一層骨を折る氣になるであらう。今話した通り其臥床の上に赤ん坊を置くと、傷み苦んで居る病人に樂を與へ辛さを忘れさせる事が非常で、百萬

だら小理窟を並べて忠告するより何程利目があるか知れぬ。又有益な事、善い事の噂は一つしても同様の効能がある。併し人は大方病人の邪魔にならうと掛念するてあらう。成程其説は如何にも尤であるけれども茲には二つの別が有て其時其時の場合を見ねばならぬ。若し病人が何事か爲なくてはならぬ時には、又外の事に考を移させて邪魔をするのは宜しくない。其の爲ようと思ふ事を助けて爲せる様にせねばならぬ。併し乍ら病人が已に其事を濟ませた時か又は何事を爲るのも叶はぬ時には、有らゆる手段を盡して之を邪魔するが善い。面白い珍聞を話して聞かせたり、赤ん坊を連て來て見せたり、新規な事を考へさせ又は新奇な物を見せて其憂をまぎらせるのてある。箇様にすれば不相當の苦を輕くする効能は頗る著しい。喋々と肩の凝る様な六かしい論理をヒネクリ廻はすより遙に効がある。

病人の心には物事の重い輕いといふ釣合がなく、此點に於ては丁度子供に似て居るといふ説てある。成程其通りてある。所で見舞人たる者は病人の爲め此釣合の亂れたのを眞正に直してやるのが義務てある。即ち世の中は如何して居るか之を示して物事の重い輕い觀念を明らかにしてやらねばならぬ。傍の者が手傳ふて斯様にしてやらねば病人は如何して之が出來るてあらうか。身體は病氣て有ても大人てあるから甘く飲込まゝてやれば如何にもと合點して事物の輕重が解るやうになる。此邊は子供に比べて大に優してある。さうなると周圍の廣い世界に起る四方山の事件に新な趣味を持つことになる。從つて今迄人の不深切や同情の足らぬ所から不相當に甚だしかつた苦痛も段々と薄らいで來る。併し乍ら此處迄漕付けるには實際興味のある事實を話さないてはならぬ。寢言同様の無益ぬ事は何の話甲斐もない。

（註）私の述べた諸事の非常に適用し難い二種の患者がある。不幸な事には近來此類の病人が益す流行しかけて居る。殊に金滿家に生れた女には其流行が甚だしい。甲は健康が大切てあるから何事をも爲ぬと辯解しながら、一方には何事も出來ぬ

のが悲しいと言ふ病人である。次に乙は自分や自分の友人等が勝手に智的活動と名を下して居る娯樂ごとに耽りすぎて、夫が爲め自ら其健康を害した病人である。然るに人は兎角甲の病人に向ふてぶら〳〵遊んで暮すのが善いと忠告し、乙の病人に向ふては勇氣を出せよと勸める。是は益す病を募らせるので、此程害になる事はあるまいと思ふ。

第十三章　病人に目を留める事

病人に快方かといふ問ば何になる

『病人は些と快方ですか』と問ふ、凡そ此位馬鹿げた問方もないが、又此程人の一般に持出す問もない。萬一問ふて見たければ病人附添の醫師に問ふが善い。單に御世辭ならば勝手であるが、眞實の模樣が知り度て問ふのなら醫師より外誰に問ふべきであるか。偶然來る見舞人には誰もこんな事を問ふ者はあるまい。又今日の樣では看護婦は病人の有樣に殆んど目を留めないのであるから、其樣な看護人に問ふても解る筈がない。問ふ人の聞きたい事は意見ではない事實であらう。絶えず病人に附て居る醫師か、本當に善く目のつく看護婦なれば患者が快方だとか惡い方だとかいふ意見が有りもしようが、其より外の者は微塵でも氣の利た意見のあるべき道理がない。

看護婦たる人に敎へらるべき箇條で最も肝要な最も實際的なものといへば、如何なる事に目を留めるべきか、如何いふ方法を以て目を留めるべきか、如何なる徵候が現れたら病氣の快方に趣いた徵であるか、如何なる徵候が病氣の重くなつた徵であるか、如んな徵候が大切なのであるか、何んなのが大切でないか、怠慢にした證據は何うであるか又如何なる種類の手落であつたか等の事を敎ゆべきである。

箇樣な事は皆看護婦を躾るに當つて最も大切な一科として敎えなければならぬものである。然るに唯今の所では看護婦を專門の職業として居る者も然でない者も、自分の預かるべき病人が快方になつたのか惡い方になつたのか聊かでも本當に解る者が實に

少い。

そこで『病人は快方ですか』といふ事を誰彼なしに問ふのは馬鹿な問であるが、之に對する答は皆漠として恰も雲を捕む樣なもの計であつて縱ひ苦々しいまでゝなくとも馬鹿げ切つた笑ふべき返答である。今日醫學がまだ十分發達して居ないため病氣に付ても我々の智識は尙幼稚であるから、本當に利巧な人に眞面目な答をさせたら『私に如何して知れませう。私の側に居らぬ間に病人が如何な有樣であつたか御話ができません』と言ふであらう。

患者の臥床の側で友人や看護婦が虛言八百の答をする。而して內科醫や外科醫は之を眞に受ける。若し患者自からに言はせたら一々に反對するであらうに、患者は何も言はずに默つて居る。默つて居る譯は時として氣質が優しいからでもあるが、遠慮して默つて居るのが多い。衰弱して勢の無い爲め忍耐して居るのは尙は一層多いと思ふ。左樣いふ怪しい返答は私の度々聞いた所であるが、今は爰に唯だ一つ二つ丈け書載せて見やう。

醫師が『大便は何回ありましたか』と問ふ。看護婦は『一度でした』と答へる。大概な場合に此返答は便器を一度棄てたといふ意味で、患者の實際用ひたのは恐らく七度も八度もあつたのである。

醫師が『病人は六週間前に比べるとズツト弱くなつて居ると思ひませんか』と問ふ。看護婦は『ナニ、先生、御承知の通り大分先頃から起て着物を着たり致します。今では部屋の向ふから此方まで歩けます』と答へる。實の所病人は六週間前には臥床の上に坐つたり臥床の上で何か爲て居たが、今も矢張何事もせずに臥て居る。又部屋の向ふから此方へ歩けるけれども五秒間も立て居ることが出來ぬのを看護婦は注意せなんだのである。

又今一人の患者は物は善く食べられる、少し宛ではあるが熱病は段々と快方に向ふて居る、唯だ歩いたり立つたりすることが叶はぬといふ病人であるのに、看護婦は醫師

に向ふて少しも病氣の捗らぬ趣を答へる。

（註）實際に有た事實を間違なく話すのは誰でも通例何でもない事と思ふけれども實は頗る六かしいのである。間違の出來る譯は二つある。甲は簡短な觀察が足らぬ所から起る。乙は複雜た觀察、即ち想像の力を混交る所から起る。此二種の人物は何れも眞實の所を語る積でもあらうが、目の留方が足らぬから自から不實に流れるのである。甲の人物の語る所は唯だ完全でない計りであるけれども、乙の人物の語る所は大變危險なのである。甲は幾年間も常住目の先に見て來た事て有りながら之に就て尋ねられると極めて不完全な返答をする。或は又單に知らぬと答へる。詰り此樣な人物は決して目を留めなんだのである。人は通例唯だ之を愚鈍だと思ふ。

乙の人物は矢張甲と同じく目の留め樣が足らなんだのであるけれども、自分の心に想像して之を混合る。そこて何でも全く見たか聞いたかの如く唯だ想像ばかりて述立てる。或は又人が自分に話した樣に諄々として細かに述る。けれども實は自分が曩に誰かに話した事を繰返して居るばかりて、矢張本は想像から湧た事である。此樣な事は最も普通の事て斯る人は氣を付けなんだといふ事にも氣が付かず又忘れたと云ふ事をも忘れて居るのである。

裁判官などは誰でも左樣爲やうとさへ思へば眞實の事ばかり語つて少しも虛言を言はない事が出來ると考へて居るらしい。併し中々さういくものでは無い。全く眞實の事を語つて虛言を交ない樣にするには大に觀察の力と記臆とが要る。だから法廷で述べる事に不實の申立があるのは強ち惡い心から起るのでない。

『ホンニ成程私は大變な虛言を申しました。併し虛言を言ふたと人から心付けられる迄私は虛言を言ふたとは氣付きませなんだ。本當でございます』とは實際或る人の言ふた事である。此樣な事は大概の人が思ひも寄らぬ程世上に廣く行はる所である。

色々の人の述べる證據が一致して居るのを見て愈よ間違が無いと思ふことが屢ばある。けれども是は一人が幾度もその話をするのと同じ事で、更に信據にならぬこともある。これは目の留め方の足らずして想像の甚だしい人物を平生相手にして居る者の善く知つて居る事である。

寢所にばかり臥して長く家を出なんだ病人が有つた。然るに此人が毎朝七時に遠く離れた教會へ參詣するといふことを十三人が口を揃へて證明したのを私は知つて居る。

又極めて信用のある正直な人でありながら隨分無茶を言ふたのを私は知て居る。例へば或る人が其家で一度も馳走になつたことも無いのに毎日飯を食べに來るなんかと言ふた。又教會で晩餐式の時或る人が現に自分の側で少くも二回許り跪いて聖餐を受けたのを見て居ながら、彼人は未だ聖餐を受けたことがないなんかと言ふた。又或る病院で毎日三回から五回六回位も食事を出すのを六週間も親しく見て居ながら、其病院の料理場は毎日唯だ一度しか食事を出さなんだなんかと言ふた。此樣な例は若し入用ならば幾らでも增すことが出來る。要するに概ね目の留方が足らぬから起る事である。

誘導的の問方は無益又は間違の本

唯だ答へる者の行屆かぬ計でない、問ふ者も亦行屆かない。今日頗る廣く行はれて居る問方は無益である。病人に問ふたり附添人に病人の事を問ふのに、問はれた者は色々言ふべき事があつても、止むを得ず要領を得ぬ返答をする事になる。何故といふに大抵誘導的の質問〔我心に待設けた返答を導き出す爲めに出す問〕を試みて居る問ふ前に箇樣に問ふたらキット何と返答する筈であると考へぬのは奇態である。例へば『患者は昨夜善く眠ましたか』と問ふ。所が患者によると中途に目を覺さず十時間も眠つたのでなければ善く眠たのであるまいと思ふのがある。又患者によつては折々目を覺しても何度も眠られたら善く眠た部になると思ふのもある。此通り善く眠るといふ言葉が大體判然せぬ事で、患者によりて

解方が違ふから正しい答の出る筈がない。甲の病人は五日五夜少しも眠らなかつて遂に其爲め死だ。乙の病人は眠に就くことは就くけれども宵から朝まで目を覺さずには眠れなんだ。然るに此二人の病人は例の問に逢ふて何らも同じ返答をして『善く眠られなんだ』と言ふた。是であるから問方が惡いといふのである。誰某は何時間眠つたか、又夜の何時から何時まで眠つたかと問へば仔細ないのである。何故此風に問へないのであるか〔註を見よ〕。そこで幾時間か眠つた患者であつても、少しも眠らなかつた者と同じ樣に『通宵一寸も眼を閉ぢませなんだ』と答へることが度々ある。今言ふた風に問ふたら此樣な不都合な返答は餘り出まいと思ふ。故意とでも亦たは知らず識らずでも虛言は誘導的の問には屢ば見るけれども、精確なる問に對しては餘り聞かぬことである。今一つ醫者などが屢ば誤る事がある。何か病氣に障る事でもあるか調べようと思ふて一つの問を考て出し、斯々の事が有たか否かと尋ねる。之を尋ねるのは苦くないけれども、其事より外にも病氣に障ると思はれる事が幾つか有つたらば、其有無一々問はねばならぬ。然るに此色々の事情に就て秋毫も問はぬのは間違ふて居る。例へば『昨夜街に騷がしい音はなかつたか』と問ふ。病人は『ございませんでした』と答へる。そこで醫者でも看護婦でも之を聞いたらモウ他の事の有無を問糺さずに一も二もなく病人は昨夜善く眠られたことにしてしまふ。是は洵に迂濶千萬といふものではないか。此一事よりも大切て澤山尋ねるべき事のある筈なのを尋ねもせない。之を見て患者はガッカリ失望してしまふて、必らず間違の出來る事とは知り乍らも、唯だ問はれた事ばかりの返答ぎりで默つてしまふ。此場合に醫師は患者が遠慮して居るのでないかと推量すべきであるが其樣な斟酌は滅多にせぬ。

（註）何時間眠つたか何時頃に眠つたかを問ふのは大に必要である。治療の仕方は之と大關係があるからである。若し患者が初夜の中に二三時間眠つたきりて其後は一睡もせなかつたのならば、十中の八九まで麻醉劑の必要は無いが、食物か刺戟劑か、或は溫熱を與ふれば善いのである。然るに之に反對て若し夜通し精神靜

まらずして目を覺し、朝方に至て睡氣を催す場合には多分鎮靜劑が必要て、安靜にさせて冷氣を與へるか、藥劑と輕い食物を與へるか、或は此四種とも皆與へるかである。夫故醫者は之を問はねばならぬが、若し問はねば病人に與ふべき物を如何して判斷するか。

極めて肯綮の利いた點を五つ六つ問ふて其答振て病人の容態をスツカリ考へ出し、病氣が今何邊まで來て居るかを知て眞準に報告することの出來る醫師が當世何人あるか恐らく洵に少ないことであらう。

粗漏な知らせを受ける手段

私は大きな施藥局と病院とに勤めて居た非常に利發な醫師を一人知て居る。此人は患者を診察する時に必らず先づ『御身が惡いと思ふ所へ指を當てゝ御覽なされ』と問ふのが皮切であつた。此風て極要領を得て居るから忽ちに埒があく。看護婦や患者から粗漏な知らせを寄せ集める爲め徒に時間を費す愚は決して演らなんだ。前に述べた誘導的の質問は何時でも粗漏な事を言はせるに極つて居る。

裁判所で近年に名高い調の有つた時、九人の有名な醫師に向ふて順次に次の通りの誘導的質問を出した『箇樣々々の徵候が毒より外の事から來ると思ひますか』と。然る所九人の中八人までは唯だ『左樣に思ひませぬ』と答へたきりで、此樣な事もある彼樣な取除もあるといふ風の但書を少しも添えなんだ。頓て證人を並べて互に詰らせて見た所が次の三つの事が現はれた。第一は八人の中一人として見迄毒殺嫌疑の場合に立合つた事のない事。第二は一人も毒殺より外に此樣な死狀になると思はるべき病氣に當つた事の無き事。第三八人乍ら其死狀になると思ふべき病氣と事情の主な點をさへ知て居らなんだ事である。

誘導的の質問が何の役に立つか、又如何いふ返答をさせる樣になるかを證據だてるのに此事實ほど確實な事はない。

此如く何の益にもならぬ誘導的質問の爲め遂に患者は死んで、附添人等は病人の主な

様子を更に氣付かなんだといふ様な場合は私の知て居る丈けでも幾らあるか知れぬ。

患者が食べるのと食べない食物

睡眠の事に限らず其外何事に就ても、人々は粗漏な答をさせるに妙を得て居る。此諸の點は今漏なく細く說述べる必要がない。一例を擧ると食物である。私の屢ば考へるには大抵な場合に人は『貴方食慾は如何ですか』と問ふばかりである。問ふ者が病人の容子に大した事はないと信じて居るから此様に問ふのである。如何にもさういふ事も度々あるが、併し若し大した事がある場合には丁度前に睡眠の事に就て話したのと同じ不都合が起る。一食に固い食物が二「オンス」許も食べられぬ患者も、善く食べられはするが平生と同じ程づゝ五食を取れない患者も、此問に對して同じ返答をすることが度々出來する。

又『消化は善いか惡いか』と問ふべき所を左様は言はずして『食慾は如何ですか』と問ふ人が澤山ある。消化の良否と食慾の多少と互に關係のあるのは固よりの事であるけれども事柄は丸で違ふ。

若し唯だ食慾を進めることさへ出來れば善く食べられる患者が隨分多くある。斯る患者の食べないのは世話する者の落度で、病人の好きな物を食べさせないからである。併し又葡萄も、蕪菁も同じ事で凡ての物が不味くて食べられない患者も少くない。此患者は自分に益になる物なら何でも食べて見ようとは思ふのであるが、何分にも口に入れると何でも皆食べられぬ。此場合に患者の食べないのは矢張世話する者の落度で、概して料理の仕方の惡いのが缺點である。此様な時には食慾を進める工夫よりも成るべく消化に力を入れさせぬが必要である。料理が善いとそれが半分まで消化を助ける。滋養の足りない爲め患者が除々と餓死する場合が四つある。四つの中何方が原因になっても同じ結果になるのである。

第一、料理の善くない事
第二、食物の撰方の惡い事
第三、食事の時間を誤る事

第四、患者に食慾の足らぬ事

併しながら人は此四種の區別を立てず、大概は大雜配に「患者に食慾がないのだ」にしてしまふ。

原因が違へば之に從ふて救治の法も變るのであるから、何でも漢でも『食慾不足』の一點張にせず、細かく區別を立てゝ食の進まぬ原因を窮めたら、屹度多くの人の生命を救ふことが出來るであらう。右の四種の中第一の原因なれば料理を善くすればよい。第二が原因と見れば他の食物を撰べばよい。第三が原因ならば患者に食物の不足しさうな時刻を見測つて食べさせばよい。第四が原因とあれば患者の好む物を示して之を撰ばせるがよい。時には意外な物を好むことがあるものである。併し此等の救治は何れでも其れに相當して居らぬ缺點に對しては何等の効をも有せぬものである。

一般の場合に就て言へば二つの場合がある。一つは患者が非常に氣力を失ふて此四種の中何が惡いのか自から氣を付ることの出來ぬ場合、一つは遠慮が深すぎて口へ出さ

ぬ場合である。是は私が何處までも人の注意を促さねばならぬ點である。又患者は左なきだに自分の事に思ひ苦めて居るのだから此樣な事に又氣を付けさせやうとするのも宜しくない。

且又箇樣な事は患者に氣を付けさせずして自からが氣を付けるのが看護婦や朋友の任務ではないか。之が任務でなければ何の爲に附添ふて居るのか殆ど譯が解らぬ。

（註）看護婦を病人に附添はせるのは病人に身體の勞力をさせぬ爲めであると一般の人は考へて居るが、私は寧ろ看護婦の附添ふて居るのは病人に心の勞力をさせぬ爲めであると言ひたいのである。若し患者が身體の手傳よりも心を遣はない樣に世話をして貰ふたら測られぬ程の利益になる事と確く信ずる。然るに自宅に在る患者を見ると看護の仕方が丁度此反對になつて居る。病院に於ては善く整ふた規則があつて一切患者に心を遣はさぬ樣にしてあるが。是が屢ば非常な好い結果を病人に與へる。

下痢について

又時によつては「下痢をしますか」と問ふことがある。さうすると虎列刺になりかけて居る劇しい時でも、一寸した不養生から來た些細な下痢で其原因を取除いたら直に止む時でも、或は便が聊か緩んで實は少しも下痢でない時でも、同じ返答が出るかも知れぬ。

此と同じ樣な場合を尙ほ幾〻も玆に述べることは無益である。何しろ今日の所では物事に善く目を留めやうとすることが甚だ乏しい之が乏しい。以上は醫師は病人の朋友などには一切逢はない方が善い事と思ふ。其の言ふ所が醫師に間違をさせなければ善いけれども、間違はせる方が多いからである。之が爲め却て病人は快方に赴く場合も有るけれども、却て惡くなる場合も亦た屢ば出來る。

患者が幼い子供である時は萬事盡く看護婦又は母親の責任で、綿密に精確に目を留めて之を醫師に報告すると否とに由て何から何まで全く違ふてくる。然るに今日の有樣を見ると綿密に正確に目を留めるといふ大切な事を行ふて居る人は實に少ない。

確で手早い觀察を習ふ法

名の聞えた人が有つた。然し詰らぬ事ばかりで名の聞えた人なのである。其一人の息子を敎育する主なる目的の一つは正確で綿密に其上手早く物事を觀察する習慣をつけるのださうで、此目的を達する爲め次の樣な事を其手段の一つとして一個月の間行ふたと自から私に話した。即ち其息子をつれて或る玩具店の窓の外を早く通り過ぎる。そこで親子兩人とも窓先を通る時目についた品物を出來るだけ澤山鉛筆と紙とに書記して互に見せ合ふ、愈よ何方が正しいか調べる爲め再び其店へ戻るといふ仕組であるさうな。所が何度試して見ても何時も子供の方が勝つて、父は三十點より書留められなんだけれども、子供は四十點も書留め、減多に間違が無かつたといふことである。

その後私は屢ば考へるのに如何にも面白い工夫である。之をもつと高尙な目的に使ふたら實に善い敎育の一端であらう。我々看護婦を業とする者には甚だ以て肝要な事である。といふのは手早く正しく目を着ける習慣を養へば夫だけで有用な看護婦になれ

るといふ譯ではないが若し之がないと如何程忠實に勤めても看護婦としては役に立ぬからである。

私の知つて居る一人の看護婦も幾つも病室を引受けて居て病人の數も多く種類も異り醫者から指定された食物が一々違ふに拘はらず細な點までも一枚の紙に控之置かず之を頭の中に敲き込んでおき、又一々の病人が毎日何々を幾ら食べたといふ事まで一伍一什チャンと呑込で居つた。此樣な女も珍らしいが、今一人妙な女を知て居る。是は唯の一人しか病人を預つて居なかつたに拘はらず、幾日の間もその病人が食物に手を觸ずにかへすのを給仕して居ながら更に知らなんだといふ呑氣なものであつた。唯今の樣な事を鉛筆で紙の端に一々控えて夫が心覺になると思ふたらば必らず其通りするが宜しい。が私の思ふには控をすれば記臆と觀察を强くすることは少なくて、之を不具にすることが多い。併しながら如何樣にしても目を着ける習慣が得にくいならば寧そ看護婦の職業を止めてしまふ方が善からう。といふのは其樣な鈍な人は幾ら親切

てあらうと幾ら氣を配らうと天性看護婦の職に不似合な人であるからである。

固形體の食物一「オンス」は何れ程の分量であるか、流動一「オンス」の嵩は幾ら程であるか、此位の事は少し慣れゝば少くとも目分量で解ること請合である。是が甘く解つたら觀察と記臆は何程省けるか知れぬ。さうなると「今日は誰某が肉を一「オンス」ばかり食べた「又誰某は肉の汁八勺ばかりづゝ一晝夜の間に三度食べた」と早速答へられる。「誰某は終日何にも食べなかつた」の「私は誰某に平生の通り食事をさせました」といふ樣な怪しい返答をせぬでもよいようになる。

確かで手早い觀察は看護婦に必要

我英國の病院に居る古風な婦人慈善會（天主教）の看護婦中に恐ろしう目の力の確な人を私は幾人も知て居る。患者に飲ませる葡萄酒でも水藥でも皆目分量で注ぐと恰も「メートル」で量つた通り少しの違もなかつた。私は皆樣に此通りに御成なされとは言はぬが餘程確にならなければ決して此眞似は出來ぬ。今之を爰に擧示たのは外でない、看護婦たる者が平常の習慣から目分量で寸毫

の間違も無く藥を量る者さへあるのだから、我が預つて居る病人が如何程の食物（オンスにして）を食べたかゞ知れぬ樣な女では到底看護婦であると言はれないといふのである（下註を見よ）病院で患者に食物を分ける者は、秤を用ひずして夫々病人に肉を割付け、誰には十二「オンス」、誰には六「オンス」といふ樣に目分量で器に入れる。然るに茲に斯ういふ事がある。看護婦の預つた患者は如何なる食物を出しても嫌ふて食べない。看護婦を欺く爲め皿に入れてある食物を攪返したり匙を「コップ」に突込んだりしておく。看護婦は斯る謀叛があるとは知らず、最初持て來た通りで少しも耗て居ないのに心付かず、サッサと之を下げてしまふ。醫者が來て尋ねても「患者は平常の通りスッカリ食ました」と答へる。が實は「平常の通り食膳を下げました」のである。

（註）英國の女は精密な觀察の力はあつても之を行はぬ

精確な觀察を爲す器量を持て居ながら是程觀察に下手な者はない。斯く言はゞ餘り思ひ切た言方だと思はれようが決して間違ふた說ではない。佛國や愛蘭の女を見ると物を認める力が早すぎて完全な確な觀察をすることが出來ぬ。又獨逸婦人などは餘り鈍臭くて英國婦人程に手早い觀察をすることが六ヶ敷い。然るに英國の婦人は精確な觀察に慣れてをらぬから能く其の力に叶ふ手仕業をさせても信用して打委す譯に行かぬと屢々男子から攻擊を受けて居るのである。他の國では左樣でない。例へば藥の調合などには婦人（其智力は概して英國の婦人より勝れて居ない）を用ふるが、其仕事を見張て居る男子の言ふには、男を使ふよりも女を使ふ方が確實で、注意深くて、粗忽から間違を起すことも少ないと。

私の思ふのに英國の女は手早い

英國の婦人は確に斯くの如くなれる資格技量を有て居るのである。

私が子供の時分に或る人から次の話しを聞いたのを記臆して居る。誰かが怪我をしたので此の人（私へ話した人）が二人の女兒に『私の部屋に「サルヴォラチル」（炭酸安謨尼亞の酒精溶液）の罐があるから』と言ふて之を取りにやつた。所が其の一人なる「メリー」はポカンとして動かなんだが、今一人の「ファニー」は早速

走つて行つて罎を一つ持て來た。が此は「サルヴォラチル」の罎でも無ければ言付けられた部屋から取て來たのでもなかつた。

此樣な氣の利かぬ事は此の女兒ばかりでない、誰でも生涯箇樣な事をして居るのである。例へば或る婦人が窓の側にある卓子に大きな新らしい赤表紙の本が一冊あるから取つて來いと言はれる。畏まつて取つて來たのは善いが、煖室爐の側の棚に載て居つた小さな古い鳶色の表紙の本が五冊といふ間違になる。而も此の婦人は大方一月にもならうか毎日缺さず其部屋を取片付けて居たのである。些とでも觀察の力があつたなら何時も同じ所にばかり在る本が一月の間毎日目に留まらぬ筈はないのである。

平生から觀察に慣れておくのは何か至急に逼つた事の起る場合に尙更ら必要である。この話の人はその女兒の伯母であるそうなが、「ファニー」は毎日伯母樣の室に居つたてあらうから、若し平生から彼の「サルヴォラチル」の罎に目を留めて居つたなら、イザ入用といふ至急の場合に大方之を取て來ることが出來たであらうと思はれる。

此樣な粗忽な間違は二つの原因から起る。甲は言葉を聞いた時早速之れに注意せず、賴まれた事の唯だ一部分だけを聞いて居るからである。又乙は物事に目を留める習慣が足らぬからである。

私は看護婦方に注意しておきたいのは、常々から同じ物を同じ場所へ置く樣に注意することである。常々極つた所に極つた物を見る癖をつけて記憶しておかないと、何時突然物の要る事が有るか知れず、其の時になつて自分が自から何處へ置いたか急に思ひ出せぬであらう。

急に逼る性質と漸々積累る性質との區別

次に讀者の注意を促したい事は前のとは筋が違ふが是も亦た看護婦が屢ば目を留めないで居る事である。即ち人には急に激發し易い性質と一時に激せぬ性質とがある。一時に激せぬ方を私は「漸々と積累る」性

質と名けたい。甲の人物は一寸でも心に觸る事や氣に掛る事があれば一時に破裂彈の如く破れるが後は極愉快に眠つてしまふ。乙は同じく癪に觸る事や心配事が出來ても自若て天下泰平の有樣、時には知覺が鈍つて居るのかと思はれることさへある。此樣を見て人は「些とも彼人に感せなんだ」と言ふて安心するけれども、軈て時が經つに從ひ漸々と衰ろへてくる。是は丁度麻酔劑と緩下劑との作用と同じ事で、麻酔劑は忽ちにして其効果が見えるけれども、緩下劑は大抵二十四時間程せぬと効驗が現はれぬ。甲の人物は旅行をするとか、誰か人を訪問するとか、慣れぬ事をして力を出すとかすると立どころに身體に感へるけれども久しからずして本の通りになる。乙の人物は其當時こそ一寸目には善く耐へられる樣子で平氣らしいが、漸々衰へて遂に死んで仕舞ふか或は生涯立たなくなる。そこで人は兎角一時に激し易い性質は誠に處置にくいと言ふけれども私は漸々に積累る性質の方が幾ら處置にくいか知れぬと思ふ。甲の人は豫期した通り直ぐ破裂する、併かし破裂した後は大風の濟んだ樣で何にもな

い。然るに乙の人には閉口する。氣に入たのか入らぬのか一向煮え切らないて全然見當がつかぬ。此後如何なる事になるのかならぬのか推察の仕樣がない。だから此型の人物に邂逅つたら斯樣々々の結局は如何いふ風になるかといふことを十分細かく觀察せねばならぬ。一つ出來事が有つたからといふて決して直に其結果が見えるのではないからである。若し觀察が粗末であると大失策が出來る。

御幣擔ぎは目の着け方が惡いから起る事

凡そ御幣擔ぎの說も澤山あるが大抵皆觀察が惡いのと理窟の間違つて居るのとから起るのである。からして觀察力の惡い人は大抵皆御幣擔ぎである。農夫が牛や羊に病氣の起るのは魔法をかける者のあるからだと思ふなどは卽ち是である。鵲を一四見れば結婚があつて、三匹見れば死人があるといふのも同じ類である。愚昧の人民は兎も角も、最も高尙な敎育を受けた人々まで今日動もすれば之に善く似た事を言ふて、此病人は死ぬるとか生きるとか言ふのを幾度も聞いた事がある。

病は餘り面相で知れぬ

身體の健康なのが面に現はれる如く病氣も亦た面に現はれるのは疑もない事である。けれども普通の人や邂逅に一寸と見舞に來た友人などに取ては、身體中恐らく面ほど病の重い輕いを現はさない所はあるまい。何故といふに身體中で色々の事から影響を受け易い所は面が第一である。暑い寒いから、空氣の良否から、食物や飲物の加減から、其外種々萬端の事が面の相好に響くから、色の好いのが健康なのか惡いのが果して大病なのか素人の解つた事でない。人の面色の良いのを見て此は寒さに當つたのか、暑さに當つたのか、十分崛强であるのか皮膚が感じ易いのか、充血して居るのか赤面して居るのか、將又其外何かの原因から來て居るのか、此繁雜な區別は一般の人の知り得ない所である。一般の人は之を知るに足るほど目を留めたことは極稀であるか又は決して無いと言ふても差支は無い。又身體の衰へ弱つて居るのも面では迚も知り難い場合が屢ばある。肉の良否や色の良否、或は血の循環其外諸の事を見分けるに至ては、手の方が遙に顔よりも確實な證據になると言ひたい。

無論唯だ顔の何處かにばかり現はれる病氣も幾つかある。目や舌などが夫で、瞳子の恰好を見て始めて腦に大變異狀のあることを知る場合の如きである。けれども是は唯だ偶然の觀察の話で、一般の場合に就ては身體の全體を細かく見ねばならぬ。面相を當にしては大間違が起る。彼人は達者「さうに見える」、惡る「さうに見える」、快方「らしう見える」、惡い方「らしう見える」などと人は口々に言ふが、細かく觀察する人は當るより當らぬ方が遙に多いと斷言するに躊躇すまい。

驚くのは世上の人が極々僅な觀察により、或は全く何の觀察にもよらず又は遠い昔し己に其眞實で無いとの分つて居る筈な何か諺に依て臆面も無く遣て居るとである。

私の今日迄知て居る患者の中には極めて長引いて苦しい病氣で痛は甚だしい身體は衰弱する、睡眠は足らぬといふ有樣であるに拘らず、愈よ息を引取る二三日前迄頰の色は如何にも壯健らしう見えたのみならず、崛强な子供の樣に斑色をさへ帶びて居る者が澤山あつた。又此不仕合な病人に「御容子が宜いのを伺ふて嬉しふ思ひます」「此調

子ては九十歳までも長命なさらない道理がありませぬ」「何故今些と御運動なされて御慰みにならないのか」其外我々が平生度々耳にする所の絞切形の挨拶を以て包圍攻撃をする人を何十度とも無く見たのである。

併し病氣が面相に現はれる事は兎に角慥な事實であるから、看護婦たる者は何卒之を研究して貰ひたい。

經驗を積だ看護婦になると病人の顏の色が何となく所斑になつてゐるのを見て、ハアー是は昨夜麻醉劑を飲んだので丁度今は精神の沈んだ反動が來て居るのであるといふことを善く見て取る。けれども經驗のない看護婦は此色を見て壯健な證據と思ふてしまふ。

又同じ元氣の衰へたのても顏の色では更に知られないのもあり、青白くならずして蒼色になるのもある。さうかと思へば又色が青白くなるといふ類の變つたのもある。

尤も是も素人の目には見分けられぬ。

此樣に一寸目ては一概に斷言が出來ぬから、看護婦て其區別の出來る者は稀てある。

患者が幸にして青白い顏をして居るか、或は咽喉の筋肉に差響いて聲が出ないのて無ければ溜ない、看護婦は動けぬほど弱つて居る患者をつかまへて何の用捨もなく喋り散らすのてある。

併し今言ふた二種の弱方は唯だ患者の顏の模樣て十分見分がつくのてあるから、目の高い看護婦は其樣な迂濶な事はせぬ。

患者は夫々の特性がある

又患者には夫々の特性が有て銘々好惡が違ふから、看護婦は之を見分けなければならぬ。即ち全く自分勝手にさせて貰ふて成るべく彼此世話を焼れないのを好く病人もある。又精々大事に掛て貰ふて人に不憫がられ、絶え ず誰にか側に附て居てもらいたい病人もある。此各自の持前は本人の望むより以上に好た通りしてやるが善い。附添人は却て是位の心掛で居つて善い位になる。何故といへば甲の病人即ち一人棄置てもらふ外何にも願しくないといふ病人へ無理に干渉いに

行て厭がらすこともあり、乙の病人即ち人に甘へる質の病人を奪置て一人クヨ〳〵見放されたと云ふ樣な思をさせることも度々出來るからである。

看護婦は自ら患者の段々弱るのを注意せよ

患者は一個月以前には斯々の事が出來たけれども今は出來ぬ、一個年以前には是々の事が出來たが今は出來ぬといふ場合がある。看護婦には一々患者から聞かねば此呼吸が悟れぬといふ間の拔た者が多い。そこで患者は絶ずそれを看護婦に示さねばならぬ。永年不治の病氣に難んでゐる病人に取ては是程辛い事は少ないと思ふ。若し自分で之に目が着かないやうでは何の爲の看護婦か解らぬではないか。然るに是位の事が看護婦の目に留らなかつた爲め大事（生命に係はる大事で徐々來ることもあれば急に來ることもあるが）の起る場合が一番多いと思ふ。而も此樣な事は金力と身分の威光とて求められる物なら何時でも求めることの出來る良い家柄にもある斗でなく重に左樣いふ家柄に多いのである。例へば病人が一ケ月前には獨で風呂から出られたり又一週間前には鈴を鳴す所まで歩るけたのを見た看護婦は今でも夫が病人に出來ることゝ早合點してしまふ。一週間前や一個月前と容態の變つて居るのに少しも目を留めぬのである。何かの怪我で誰かゞ病室へ這入てくればよいが、左なくば病人は衰弱しきつた儘我力で何事も出來ず一人棄ておかれる。夫とも思ひ掛なく卒中が起つたか、麻痺したか、俄に氣絶した樣な不意の出來事なれば致方もないけれども（箇樣な事さへ附添人が平生善く注意して居れば豫じめ知れる事で、本當に不意なといふ場合は少ない。併し假に不意に起つたとしても）左樣でない場合に此不調法が起る。即ち衰弱の甚だしくなるのは豫て覺悟で到底免れ難いのみならず、絶えず惡い方に傾くのが日々誰の目にも分るといふ明かな場合にも、此樣な不始末を仕出來すのである。

看護婦の觀察が足らぬから起る變事

又何時も臥床に閉籠つてばかり居ない病人が偶ま下痢とか嘔吐とか或は其外何か變た事のあつた爲め二三日の間無理に臥床へ引籠らせられる。癒て始て臥床から起る。看護婦は外の部屋へ御出になつても善い

と言ふて行かせる。行かせた儘で其後何分間かは之を世話する爲め其部屋へ這入て來もしない。病人は屹度眩暈がするか寒氣がするか或は何か外の事が出來て居るに違ひあるまいが、夫には更に心づかぬ。若し此樣な騷になると辯解して「ナニ御病人はヤイ〳〵干渉ふのを御嫌ひなさるのですもの」と言ふ。成程何週間か前には病人がソンナに言ふたこともある。併し乍ら此頃の樣は容態になつても干渉ふてくれるなとは言ふた覺がない。縱病人が其樣な事を言ふたにしても、看護婦は萬一を案ずる深切があるならば、何か口實を拵へても部屋へ這入らねばならぬ筈ではないか。患者の中には初て臥床を離れた後眩暈や惡寒や空腹の儘で一二時間も捨置かれた爲め急に病氣が後戻りして到頭死んだ者が澤山ある。

> 觀察の力は段〳〵衰へるか

けれども、觀察する力は殆んど全く進歩してゐないかと思はれる。今日迄病理學の知識は恐ろしう增へた。病理學とは病氣が人の身體に起した結極の變化を敎へる學問である。然るに此變化が身體の中でズン〳〵進んで居る間には必ず徵候がある筈であるのに之を觀察する術は一向進歩した模樣がない。寧ろ醫學の中で大切な部分である此の觀察の術は漸々〳〵衰へて來る方ではあるまいか。

「エ、誰某が危篤だと。ア、誰某が死だと。私は前の日に見たのだが見た時には大分快方であると思ふた。あの時の氣色ではソンナに俄な變化が起らう筈がない」などとは看護婦や病人の友人などが兎角言ふ事であつて、主任の醫師までが折々箇樣に言ふ。我々は皆此の如き言葉を何十度も聞いて居る。併し乍ら「何か死にさうな氣色が有たに相違ない。目を留て見たら解つたのであらう。他日又誰かの病氣の時に注意する助にもならうから、如何いふ氣色が有たか聞糺して覺えておかう」と言ふ人は絶えて聞いたことがない。此樣に言ふ方が道理に合ふて居ると思へさうなものであるが、一般の人の言ふ所は左樣ではない。人は一角利いた風で「何一つ認むべき事がなかつた」と大膽な事を言ふて、己の觀念の誤つたことは棚の上に上て居る。

冀はくは遲蒔ながらでも病人や死人の容子が如何で有つたかを顧みて善く目を留め、病氣が再び後戻りしたり差込だり生命を取つたりする時の氣色は如何であつたかを肝に銘し骨に鐫け、何等の怪い氣色も無かつたの、何等の不安心と思はるべき模樣が無かつたのと大膽な事を必ず言はぬ樣にして貰ひたい。

（註）急遽に死が近づいて病人の容態が危なくなつた時其顏に如何なる樣子が現はれるか、是は場合に應じて色々異ふのであるが、一々之を觀察する機會のある人は少いものである。そして是は餘り必要でもない事であるから、唯だ最も著しい一例だけを示しておく。神經質の病人が死ぬ前には顏が靑白くなる（是だけが世に認められて居る徵候である）多血質の者は紫色になる。膽汁質の者は黃色になるか、又は所斑に種々樣々の色になる。所が一般に信ぜられて居る說に據ると、顏の靑ざめるのは恐るべき事や病氣や其外種々の事から人の身體に劇しい變化が起つた徵であるといふ。然るに是は實に甚しく間違ふた觀察である。小說などには

一般の事情の觀察

譯なしに左樣してあるが外の處では通用せぬ。

有らゆる事情に目を着ける習慣の足りないのと、平均の場合を本とする習慣とはともに均しく屢ば人を誤らせる。

醫者の樣な事を職業にして居る者は唯だ身體の機關に現はれる變化（手を傷したとか腸に異狀があるなど）を觀察する癖がある。病氣の最後の結果即ち死ぬか助かるかに就ては此樣な人は少しも觀察をせない人と同じく判斷を誤ることが少くない。例へば脚を折た者があるとする。外科醫は何處が惡いか唯だ其足を一度見たら直に解る。翌朝になつて之を見たからとて前夜に見たのと變つた事はない、依然として脚は折て居るのである。そこで病人が如何なる容態になつて居ても、此後如何なる事になるにしても、脚の折た點には變りはない、脚の接るまでは誰に見せても直に知れる。其外身體の機關に起る諸の病は皆此通りで、今日は腸が惡いのに明日はチャンと耳が聞えぬといふ樣に變りはせぬ。經驗のある醫師であらば一度脈を取て是は動脈瘤で何時

ふは之が爲めに死ぬといふ事を知つてしまふ。

併し乍ら多くの場合は左樣で無い。愈よ死ぬるか生きるか結局の所を間違なく判斷しようと思へば、患者の平生に於ける凡ての有樣を洩なく調査せなければならぬ。大きな都會で社會の模樣が至つて錯雜した所に於ては、身體の機關に起る一の病で死ぬ者は割合に少ないが、幾つも幾つも煩ふた後に或る病で死ぬる方が幾ら多いか知れぬ。即ち澤山の病氣が寄つて終に生命を取る丈の總量を成すのである。然るに此消息を知らぬ者は兎角「誰某には何にも機關の病氣がない。あの人が九十や百まで生きられない筈はないのに」と不審を打つ。此說は實に阿呆けた言分で、此程人を誤らせる事はない。時によれば一寸話に光澤をつけて「安靜にして善い食物を食べて善い空氣を吸はうものなら長生のできぬ筈はないに」と一言添える人もあれば又添えぬ人もある。無學な人物は此後の句なしに頻と前の句ばかり囀づる。其言葉の中で唯だ大切なのはこれであるけれども、之を何にも益に立てぬ。私は眞に或る名高い醫師が病人の友人に其全快を請合ふたのを聞いた。何故かといふと、醫師が其養生法を細かく指圖して置いた所が、患者は何年の間か之を大切に守つて嚴重に指圖通りに行ふた。之が一つの原因である。又病人は平生の不養生を如何しても改められなんだが、一朝醫師の言葉を守つて斷然之を棄てた。之が今一つの原因である。

（註）私の知て居る事に次の如き二つの場合があつた。一つは或る男が接で貰ふた關節を態と何度も外づして居つたが、外科醫はわざつとごとゝは知らず、皆氣の毒に思ひ色々手を盡して遣つて居つた。又一つは或る患者に就て醫師が別段何も病氣がない何の機關が損じて居るとも認められぬと言ふたのが、其週中に死でしまふた。此二つの場合は看護婦の行届くか否やが問題で、細かく目を着けておいた事を細かく醫師に告げた御蔭で前の患者には僞りをさせぬ樣になり、後の方は今死にかけて居るのに退院することをさせなかつたであろうに。

私は今一歩進めて話しておく。身體の機關には別段疵瑕が出來たのでなく、唯だ

其作用が弱くなつたか又は作用の調子を亂した爲めに起る諸の病には、一日に僅か一度ぐらゐて且も毎日同じ時刻に患者を診察する醫者では本當の事情が解るものでない。若し解つたら全く僥倖當りである。何故といふに日中頃になると箇樣な患者は光線を十分に受ける、空氣も新鮮なのを吸ふ、旨い茶も飲んだ、肉の汁も歡つた、「ブランデー」も飲んだ、足には暖足器も入れて貰ふた、身體を洗ふて淸らかな布で拭ふて貰ふた、だから氣分は誠に爽である。然るに其日の朝は如何であつたかと言へば、脈搏は早くて早鐘を打つ如くである。眼瞼は脹れ上つて居る。呼吸は忙しい。手足は冷たくなつて居る。兩手は靜でない。そこで晝時分に此病人を見る者は朝見たのと同じ患者だとは思へぬくらゐである。箇樣な時看護婦は如何するか。醫師に向ふて「昨夜は夜通し最早死ぬるのかと思ひました」などと言ふては宜くない。成程夫は誠の事であらう。併しそれは醫師に納得させる道では莫い。醫師は事細かく昨夜來の成行を聞きさへすれば、其事實から正しい判斷をつけるのは看護婦より上手に違ひない。醫師に入用なのは事實であつて如何程丁寧に述べてもその意見は入用でない。意見を述べるのは醫師の役目で、看護婦は事實だけ述べたら善いのである。だから如何なる病人を預つても看護婦たる者は自分で觀察しられる丈の事實を觀察して之を細かく問違なく醫師に報告するのが極めて必要である。

此樣な患者には一日の間に脈搏の甚だしく變化することが少なくない。私は之に就て看護婦方の注意を促さねばならぬ。我々の極普通に見る所は斯うである。午前の三時と四時との間には脈が早い。多分百三十程打つこともあつて、其細きことは絲の如く少しも脈と思はれぬ斗、極細い絲が皮膚の下に動いて居る樣である。サア夫から後はモウ患者が眠らない。段々と日中に近づいてくると脈は減て八十位になる。矢張細く弱いけれども慥に認められる程になつて居る。若し晝の間に患者が興奮してをつたら夜に入ると脈は殆んど認められぬ位に弱くなる。是

が先づ普通の脈の有様である。其外又一日中に色々變る場合も澤山あるが爰には述べられぬ。炎症や膈窒扶斯に於ては其様な劇しい變化がない。炎症は九分九厘まで脈搏で察せられ、膈窒扶斯は此上もない低い脈を伴ふて來る。醫師も看護婦も兎角脈の事に注意せない様になる。又醫師は病人に附きつて居ないから無理がないとしても兎に角脈の變化は實に大切な事である。

今述べた様な甚だしい脈の變化は三四日も以前より些細な苦痛の有たが原となつて突然起るとが度々ある。此些細な苦痛が積り積つて遂に生命を奪ふに足る總量となるのである。之を見て觀察の豪い看護婦でない者は皆驚き遽て實に思ひも初ぬ事であるといふ。併し爰は目の高い看護婦ならば急に衰弱して取戻のつかぬ事が起るであらうと兼々心の中に豫期へて居る。何故かといふに十分の睡眠と滋養物とが有れば其收入で資本の減るのを補ふけれども何分にも三日も四日も眠は足らず食事が薄いから力の收入が乏しい。左すれば力の資本が十分でないから衰弱するに極つて居るといふことを豫め睹て居るのである。併し此様な利發な看護婦は澤山にあるまい。

實に良い看護婦といふべき女であり乍ら患者が危急に臨んで居ることを醫師に知らせても、醫師が馬耳東風に聞流して構はなんだり、又醫師の居らぬ時よりも居る時に病人が實際よりも遙か快く見えたり或は惡く見えたりする爲めヂレッたくて腹を立てるのがある。斯る看護婦の閉口するのは無理もないけれども概して是は已の見屆けた事實を短簡く明晰に醫師へ説明する力を持たぬから起るのである。或は又醫師が遽て者で經驗に乏しく、事實を述べても之を本にして判斷を下せないから起るのである。醫師が本當に患者に注意する人物で、看護婦も亦た觀察が細かく、報告が明かな人物で有つたらば、醫師は直に看護婦に委細の事情を問ひもし、其説明を重寶がるであらう。

六 かしい學問上の事は全然知らんでも今上に述べた様な諸の事情に觀察と經驗とを積

だ人であつたらば、家族の者が各々何歳ぐらゐまで生きるであらうかと言當ることは屹度學問の力の豪い醫師が其等の人々の事情を何も取調べず唯だ脈を取つたばかりで言ふよりも必ず確かである。

生命保險會社や之に類似の會社などで加入者の身體を醫師に檢査させて居るが、若し此法を廢めて加入者の住宅の樣子、空氣、光線、水道、下水、其外諸の事情、生活の模樣を委しく檢査する定めにしたら、如何程確實な結果が得られるか知れぬことゝ思ふ。何某は實に强壯健全の立派な男ではあるが併し今後若し虎列刺病の流行する節には傳染するらしう思はれるといふことが豫め知れよう。又何某夫婦は頑丈で達者な夫婦であるが倫敦のあの樣な所で如彼家に住んで如彼に川に近くては其子は五人の中四人まで死ぬであらうといふことも前以て解らう。且又一歩進んでは何の子供が生き殘るであらうといふ事まで解るかも知れぬ。

凡て物事は平均數ばかりに目をつけると細密な觀察が等閑になる。「死亡の平均數」といふのは甲の都會で毎年何割何分の人が死ぬ、乙の町では千人中何人が死ぬといふことを知らせる斗である。けれども何某が來年死ぬ者の仲間入をするか、何某が其中に加はるかは、無論「死亡平均數」では解らない。例へば「平均數」によると來年は倫敦で千人の中二十二人乃至二十四人死ぬことが知れるとする。併し倫敦中の何の區も何の町も此割合になるのでもなければ、何の家も此割合で人が減るのではない、細かく調べて見ると解る事であるが其中の或る區では二十四人どころか三十人も四十人も死ぬ。或る街否その街の片側だけで此平均數より多く死ぬことがある。それ處では無い一軒の家、その家の一室に詑住居して居る家族で言ふても左樣である。尙ほ詳く言へば老人にならぬ前に死なぬ筈の人が死ぬのである。そこでソンナ街のソンナ家に一室を借りてゐる家族から死人が出たといふことが分つたら如何であらう。苟にも此事に就て意見を立てようとする人は之を見るや大に顧みる所あつて其意見を變ずに居られまい。

死亡平均數では死人の割合しか分らぬ
誰が死ぬかは觀察に依て初て解る

箇樣に段々調べて行くときは我々の觀察が益す精しくなり、我々の判斷も益す正しくなるであらう。

窮民授産所の帳面を調て見ると何代も續いて同じ姓名が現はれる。一つ無くなつたかと思ふと直ぐ又出て來る。是は人の善く知つて居る所である。其譯は貧民の夫婦が子を生めば親と同じ所に住んで育て上られる。成人すると親の名を襲で又此所の厄介になる。軈て又親の眞似をして同じく子を育てる。此樣に親子代々同じ境界に育つから同じ人物になるのである。人が死んだり病氣に罹るのも丁度此授産所に似て居る。といふ譯は同じ家族や同じ家屋から同じ病氣が出たり同病の死人が出る。詰り四方八方萬事の事情が同じいから、同じ病の死人や同じ病人が出るのである。そこで此同じ事情とは何であるかを我々は何故觀察せないのであるか。

綿密に觀察する人は何處其處の家族は結婚してもしないても死に絶えて仕舞ふといふこと、又誰某の家族は道德の上にも身體の上にも段々墮落するといふことを間違なく

預言することが出來るであらう。併し此教訓は誰か學ぶ人があらうかと尋ねると、誰も顧りみない。或る家では十人の中八人といふ恐ろしい割合で子供が死ぬといふ事實が善く知れて居る。此樣に人は皆解り切た事であるから言はぬても善いと考へる。解り切た事なら明白に事實が語つて居つても誰も之には耳を傾むけず、家族の人々は一家の死絶えるまで其家に住つゞける、死絶えると又他の家族が借りるといふ有樣である。だから縱ひ死んだ人が甦つて來て其家に住むのは惡いと忠告しても、いつかな之を聞入れることではなからう。

觀察は何の爲

確實な觀察が洵に必要であるといふ事を論ずるに當りては、何の爲めに觀察するのであるかを決して見逃してはならぬ。抑も物事を觀察するのは理由もなく種々雜多の事柄を搔集めたり珍らしい事實を拾ひ集て塵芥溜同然のものを拵へる爲めでない、全く人の生命を救ひ健康の度と快樂の分量とを增す爲めである。斯樣な事に態々注意を促すのは要ぬことの樣に見えるかも知れぬけれども、男と

言はず女と言はず多くの人が實際行ふて居る所を見ると怪しからぬ事がある。何故といふに觀察といふ事は唯だ學問研究の目的を達する爲め必要て其外には入用がないと言はぬ計の擧動である。或は又病人の身體は藥を貯藏へて置く容器同然であるかの樣に思ひ外科の手術を要する病氣は患者が醫師の爲めにする御奉公の如くに考へて居る。如何にも大層らしう言ふ樣であるが實は掛直のない所てある。讀者は若し自分の預つて居る患者が何かの毒に中つて居ると疑ふたら如何するか。縱令之が爲め觀察の道は最早絶ゆるとも害毒の源と疑はれる物と患者との緣を直樣絶つてあらう。例へば患者に飲ませる湯が銅製の湯沸で煮たのであるから萬一其緣青の毒に中つたのかも知れんと思ふたら即刻之を廢てしまふてはあるまいか。けれども誰でも其通りては無い。若し毒に中つた疑のあつた時には醫師は如何にすべきであるかと、此事は已に實際醫師の道德問題になつて居る。之に對する答は極單純だと思はれる。即ち飽くまで信用すべき看護婦の手に患者を任すことを主張するが善い、左なくば寧その事毒に中つ

たといふ疑を捨てしまふがよい。

信用すべき看護婦たる者の職分

看護婦は盡く皆依賴するに足る人物てなければならぬ。即ち信用するに足る看護婦たるべき人物てなければならぬ。何時其樣な位地に立たねばならぬか知れぬから、平素十分の心懸が無くては叶はぬ。看護婦たる者は詰らない事をべチャ〳〵喋る人物であつてはならぬ。病人に就て何か尋ねられたならば、之を問ふべき權利のある人には答へるが、其他の人には決して返答してはならぬ。又言ふまてもないけれども、十分に沈着で正直でなくてはならぬ。夫ばかりでない、宗教に歸依して誠心誠意に信心な女でなくてはならぬ。人の生命は神より授けられた實も尊い賜物であつて此大切な物を實際我手に預るのであるから、何處までも自分の職分を大事にかけねばならぬ。又病人の容態から其外萬態の事情に至るまて綿密に正確に目早く觀察する人物であらねばならぬ、而して又其感情は優しくて高尚で優美な女でなければならぬ。

モ一度觀察は何の爲めかといふ問題に後戻をしよう。觀察は唯だ物事に目を着けるといふ丈の目的で其外に何の趣意もないと、

> 觀察は實際上の目的に使ふもの

斯樣に思ふ人があるらしい。例へば看護婦にして見れば此樣な事がある彼樣な事があると看露すのが職分で病氣を療すのは役目でないと考へて居るらしい。之よりも甚だしいのがある。近頃の事、裁判所で名高い調のあつた時、三人の醫師が言ふた所に據ると、毒に中られたと疑ふたのであるが赤痢の處方をして、それから毒を與へた疑のある人に其儘病人を打任せておいたといふ話である。是は實に極端の例であるけれども、もつと小さい事ながら我々の皆認めて居る事に同じ樣な無茶な遣方が隨分澤山ある。例へば患者を介抱する者は此樣な惡い空氣の所、此樣な宜くない部屋、此樣な有害な事情で患者の快なる筈がないと十分承知して居ながら、從來の如く唯だ藥を飲ませる計で、毒な物を病人の身邊から除けようともせねば病人を此毒な所から去らせようともせない。是は病人に附添ふて居る者共が屢ば白狀して居る事實である。それのみならず時によれば惡いと思ふ意見を醫師に向ふて話しもせない人さへあるのである。

第十四章　結論

> 衞生上の看護は內科と同く外科にも大切で有が併し外科の看護に代へる事は出來ぬ

是迄段々述立てた事は皆一般の患者に用ひられる事であるが、子供や產婦に至つては一層注意して行はねばならぬ。又內科の患者を看護する時にも用ひられるが、外科の患者を看護する場合にも無論同樣に用ひられる。且又出來る事ならば內科の病人を注意するよりも外科の患者を一倍多く注意する必要がある。蓋し外科の病室では看護婦は慥かに「豫防」といふ一つの義務がある。若し豫防せないと熱病とか病院壞疽とか膿毒症とか化膿性の排出物などの發生する恐がある。若し又患者が複雜性骨傷に罹つて居るか、手か足かを切斷せられたか、丹毒で艱んで居る時は、今示した病が始終病院の中に逍遙ふて居るから其中の何かゞ此患者に取付くかも知れぬ。患者が此災難に罹ると

擢らぬとは大に看護婦の良否によることで、此書物に書列ねてある諸事に注意する者ならば多分患者に此憂を受けさせぬであらう。外科の手術を受けた患者の室には兎角惡々いムッとした一種特別の臭がするので、非常に澤山化膿したり又排出物が出たりする時は殊に甚はだしい。看護婦が粗略であつて室内に此臭氣を籠らせておかうものなら、可惜花盛りの崛强な患者も漸々衰弱して此世の暇乞になるのであらう。何處から考へても必らず平癒すべき見込のあるものを可哀想なことをしてしまふ。左すれば外科の患者を護する介抱人は片時も油斷せず前に述べた諸點を守り、清潔の不足だの腐敗した空氣だの光線や温熱の乏しいだのといふことの無い樣にせねばならぬ。

此書物に於ては衞生に關係する看護法の事を陳べたが爲めに看護術といふものを見くびつてあると思ふてはならぬ。看護の術を粗忽にしたが爲め衞生上の申分の無い宮殿の中で患者の出血に手當をせずして死なせる樣な不都合が起るのである。又衞生的の看護法は行屆いて空氣や光線や閑靜など入用な條件は皆備はつて居るに拘はらず、看護婦が患者の身體を轉じたり之を清らかにする術を知らない爲め、自分で動けぬ大病人が褥瘡で死ぬるのである。けれども私は次の三つの理由があつて看護の術は此書物の中に論ぜなんだのである。第一、此書物は元來看護法を敎へる積りて書いたのでないのは、恰ど病人の食物料理を敎える積で書いたので無い如くである。第二、外科の看護法、即ち手の先でする實際的の看護術に至ては、私は歐羅巴中恐らく誰よりも澤山見て來て居るが、自から固く信ずる所では迚も書物で敎られる樣な者ではなく實地に病院の病室で研究して始めて完全に學べるのである。且私の信ずるには外科の看護法は倫敦の或る病院で古風な天主敎信者の看護婦連中が完全に行ふて居るから、其處で見るが善からう、歐羅巴中他の所では迚も見られぬ完全な遣方である。第三、外科の看護法が十分完全に行はれて居ながら惡い空氣などの爲に何千人何萬人が死ぬる。併し其の反對に善い空氣などは十分であるに外科の看護法か不十分な爲め死ぬ者とては割合に少ない。此の三つの理由があるからして此書物は衞生上の看護に重きを置い

たのである。

同じ事も大人より子供に感じ易い

再び子供の話に立歸りましよう。空氣が惡いの光線が足らんの其外種々樣々の有害な事は勿論大人にも影響するけれども、子供に差響く方がズット甚だしい。大人に害のある事なら固より子供にも害になる。併し大人の受ける害に比べるとズット速で且ズット劇しい。試に其事情を縷陳べると、先づ新鮮の空氣が乏しいこと。次は必要な丈の溫熱が足らぬこと。次は家屋、衣服、臥床、身體などを清潔にする度の足らぬ事。其外又急に驚くべき響をさせること。適當な食物を與へぬこと。萬事時刻をキチ〳〵定めぬこと。陰氣で不活潑にさせておくこと。光線の足らぬこと。臥床に在る時蒲團が多すぎ又は少な過ぎること。臥床から起た後子供を預るべき人が萬事都合よく計らふ精神を缺いて居ること。此色々な事情が一々子供の身體と心とに影響するのである。左すれば子供を世話する場合には大人を世話するよりも一層此等の事を守らねばならぬ。而して病氣の子供ならば益す以て

注意の怠れぬことが知れよう。

併し乍ら此等の事の内で一番劇しく子供の害になる者として吾々の知て居るのは腐敗した空氣で、夜になると最も甚だしい。子供の眠る部屋をスッキリ閉てしまふのは丁度子供を叩き殺すのと同じである。殊に子供が病氣で呼吸が亂れて居る時には斯る惡い空氣の中に二三時間居ることが、同じ部屋に居る大人には別段差障はなくても、その生命を危ふくする恐がある。

「赤ん坊と子供との頓死に關係した講義」といふ結構な本がつい此頃出版になつた。其中から少し拔て次に掲げるが、之を見ると注意して子供を看護することの一日も忽にすべからざる道理が解る。先づ此樣な事が書いてある「赤ん坊や年齒のゆかぬ子供が暴かに死ぬのを調べると、八九分通りまで粗相から起る不意の變事である。其煩ふて居る病氣から厭でも應でも起らなければならぬ因果因緣ではない」と

是は誠に結構な說明であるが、願はくは序に大人のことも一寸書き加えて「如何なる

病氣に罹らうとも患者の死ぬのは決して其病氣から厭が應でも起る結果でない」と言ふて欲しい。又「暴かに」といふ言葉を去るが善い（中年になれば暴かに死ぬ者が割合に少いから）此通りの文句にすれば嚮の說明は年齡に拘はらず同じく當はまる。

又病氣の子供が「不意に」死ぬ諸の原因を次の通り並べてある「人を驚かすべき突然の響。縱ひ一瞬時間にもせよ身體の表面を冷すべき溫度の劇變。手暴く眠りを覺させること。物事の急ぎ過ぎ。食物の多すぎ。聊にても急に神經系統を壓迫ること。急いで姿勢を變ること。手短かく言へば何事にもせよ呼吸の作用を混雜させる恐ある諸事である」と。

爰に亦た一言を加へて置く。大人の患者でも極めて弱いのになると今擧げた色々の原因は（之が爲め暴かに生命に拘はることは少いに相違ないけれども）遂に取戻しのつかぬ大事になる。是は決して世の人が一般に思ふて居る樣な珍らしい事でなく、實に屢ば見る所である。

又しても同じ事を喃々しく言ふ樣であるが今言ふて置くも無益でありますまい、子供でも大人でも、又病人でも壯健な者でも（病氣の子供には他の場合よりも歷々と現はれる事であるが、併し如何なる場合にでも）諸の有害な原因の中で最も生命に拘り易く最も度々起る原因は、縱ひ僅か一二時間にもせよ腐敗した空氣の中で眠る事である。夫が何週間も何月間も積れば彌よ以て恐ろしい原因になる。空氣の腐敗は其他萬多の害毒に比べると呼吸の作用を混攪することが一段甚だしく、病人をして「不意に」死なせることも亦た一段甚だしい。

寒いといふことゝ空氣が新鮮なといふことゝを混雜にしてしまふ誤も宜しく戒めねばならぬが、是は最早充分に話したから再び繰返さなくても解つて居るであらう。少しも新鮮な空氣を與へずとも患者を寒がらせて死ぬ樣な目に逢はせることもあれば、又之を寒がらせずして新鮮な空氣を與へることも出來る。出來るのみならず此方が遙かに容易い事である。是ができるとできんとで看護婦の良否が分るのである。

例へば病氣の爲め久しい間幾度となく眩暈する場合、特に呼吸器に關係した病氣から斯ういふ風になる場合には、肺臟に新鮮な空氣を與へ、皮膚を暖かにし又（患者が正氣に復つて咽に物が通る樣になり次第に）屢ば熱い飲料を與へる。是が本當の療治の仕方で、且又此より外に療し方がないのである。然るに皆樣も御存知であらうが、看護婦や子供の母親が此通りにするのは寧ろ珍らしい事で、大抵は丁度之と反對にして居る。新鮮な空氣が這入りそうな穴といひ隙といひ盡く皆閉てしまふ。最早身體は冷たく爲つて居るのに之を温めず、冷たい儘にして置く。而して或は身體の上には重い蒲團を積重ねて押付ける樣な事をするのである。

前に言ふた「講義」の中に又子供が「用心しながら心配さうに呼吸して、呼吸ばかりに十分の注意を加へてゐるらしい」ことがあるが是は子供に決して珍らしくない事で、上に數へ立てた諸の事柄の中で大に注意すべき一個條であると言ふてある。然し子供ばかりで無く大人の患者でも身體が大層弱つて來ると矢張その通り骨を折つて呼吸する樣になる。必ず箇樣な事は已に度々人の目に止つた筈の事である。

又『病氣の爲めに呼吸の作用を眞準に行へない時〔何かの原因で何かの事がある爲め〕急に十分に呼吸をせねばならぬ必要が起る事がある。而して立どころに全體の呼吸機關が作用を止る樣な結果になる』是が赤ん坊の不意に死ぬる道筋の一つである、又『生命を保つべき作用を保持て行く神經の力が足りない爲め生命の絲が斷る』ことがある。是れも亦た赤ん坊を俄かに死なせる一つであつて一番度々起ることであると云ふてある。又中年になつても此二つの道筋の爲め（俄かに死ぬ場合は割合に少ないけれども）結局生命を失ふことがある。現に私は中年の人で唯今述べた通り立どころにガックリ全體の機關が止まつたのを見たことがある、其原因を尋ねると矢張上に書いてあるのと同じであつた。

今迄言ふた事を此から引くるめて言はう。衞生に關係した事を女に學ばせるのは惡いといふ反對論の中最も廣く行はれて居るのが二ある。一

約まる所

は當の婦人から出る論、一は男の口から出る論である。次に此二の論に對する答を述べた上(第一は男に答へ、第二は女に答へる)尙一つ用心すべき事(第三に述ぶ)を擧げる。

第一、女の藥、道樂、衞生の規則を敎へて初めて之を止める事が出來る

男の反對家が屢ば言ふのは、衞生の規則などを聊かにもせよ女に敎へるのは愚かな事である。何故かと言へば女は矢庭に醫師の眞似をして困ると。成程女で道樂から藥を盛る人が多すぎて困る。或る豪い醫師が私に話したことがある。世には子供の母たる者、子供を監督する婦人、或は子供を護する保姆が必要に逼られて往々子供に甘汞を服ませる。後には始終頻に之を與へる。其分量は思ひ切た贅澤なもので、十分の經驗ある醫師の處方書には未だ曾て見ぬ所であると。又今一人の醫師が言ふ所に據ると、藥といへば女は甘汞と緩下劑より外に無いことと思ふて居るらしいと。是は皆實際の事で、此樣な人が多すぎて困る。流石其處は專門に職業とする者には、素人女が道樂半分に無茶苦茶な藥を盛る樣な眞似をする者は無い(註を見よ)即ち眞に經驗があつて觀察力の高い看護婦は其樣な馬鹿な事をせぬ。此の如き看護婦は自分の爲めにも他人の爲めにも藪醫者の眞似をせない。だから子を持つ母達でも子供を監督する婦人でも子供を護する保姆でも衞生に關係した事を觀察し經驗する樣に敎るのは、素人細工に藥を盛る不都合を止めさせる法にもなり、又醫師の手數を省かせる法にもなる。何故といへば此敎の無い者は又しても醫師の命令に背くから實に治療の妨になるけれども、此點に素養があれば能く其命令に從ふから、若し醫師が介抱人に此心得のあるとを知れば萬事大層仕易いのである。詰り女に此敎育のあるのは醫師の仕事を省かせる。併し醫師は些とでも仕事の多くなる樣に病人が增えるのを望んで居るなんどとは誰も思ふものはない。

素人細工に藥を盛る危險

(註)一度醫師から「靑汞丸」(水銀より製した丸子)の處方を貰ふた覺がある所から、通例の緩下劑であると思ふて一週に二三度人に與へたり自から服んだ婦人を私は澤山知つて居る。其揚句如何な結果になつたか推て知らるゝてあらう。或る時の事私は丁度其一人に關係して居たが、之を知るや否

や其由を醫師に告げた。醫師はそこで處方書を改めて割合に毒の少ない通じ丸を服ませることにした。然るに此婦人が其後私の處へ來て、今度の藥は前のに比べると「半分も私には效驗がない」と散々に覆した。

婦人達が若し藥を服んだり服ませたりしたければ、最も安心な道は其都度〳〵に醫師を呼びにやるのである。私は勝手氣儘に藥を服んだり人に與へたりする女を何人も知て居るが、少しは藥の事が解つて居たのかと言へば左樣でない。極く有觸た藥の名さへ覺えようとも爲ないで例之ば「コロシント」と「コルシキユーム」とを取違へたといふ位である。

隨分感心な婦人達があつて己の住む地方で近隣に澤山病人のあることを態々倫敦の知己の醫師に手紙で知らせて平生自分の好む處方書を貰ひ、友人にもせよ近隣の人にもせよ服みたい人に其藥を與へるといふのである。併し乍ら何の病には何の藥が善いか、如何して用ひるか、之を服んで如何なる結果になるかも知らずして無闇に人に藥を施すよりは、我が近處隣りに住んで居る貧乏人を說勸たり助けたりして其戸口の前にある糞堆を取除けさせ、或は開けられる窓に取換させ、或は「アルノット」式の通風器を備付けさせ、或は其家を掃除させたり石灰を塗らせたりする方が餘程善くはあるまいか。此通りにしたら慥に恩澤を蒙る者が多いに違ひない。知りもせぬ藥を施して服ませた所が其利益は甚だ怪いと思ふ。「ホメオパシイ」といふ治療法が出來てから素人の女が道樂に藥を盛る習慣が大に改良せられてきた。といふのは此療法の規則は至極感心で、極少量に藥を盛るといふのであるから、割合に害が少ない。盛る分量を微塵に減すのであるから、素人が道樂にする馬鹿さ加減も自づと微塵に減つて來る。だから女が物好で藥を與へたければ此治療の式に從ふて與へさせるが善い。さうすれば何の害にもなるまい。

婦人達の中に廣く行はれて居る誤がある。人は皆二十四時間に一度づゝ便通を付ける「必要がある」といふ想像で、若し之が無いと一足飛に緩下劑と來るのであ

る。經驗の上から判斷すると是は丁度反對である。

併し此樣な事は醫師の支配する領分であるから、私は此上他人の領分へ立入るまいが、唯だ繰返して戒めて置くのは醫師をも迎へすして勝手千萬な緩下劑を毎日服んだり子供に服ませたりすることは決して爲てはならぬ。

自分で食物を撰んで腸を整へることが出來ぬ人は甚はだ稀なものである。女の人は皆何を食べると便通が善いか自分で氣をつけて知れる筈である。私の知て居る所では肉の足りないのも秘結を起せば野菜の足りないのも之を起す。併し麵包屋の麵包はズット甚だしい。何よりも善い療し方は自分の家で拵へた蒼色の麵包である。

> 第二、病理學と觀察と醫學と自然とは夫々何を敎へるか

今度は婦人が度々反對する論である。自分等は「病理學」は解らず、又た「解剖する」ことも心得ないから。到底衞生の法則や子供の健康を保つべき道を知ることは出來ぬと。併し是は何も彼も混淆に

して居るのであつて此亂れた考へを解て合點させるのは中々容易でない。大體病理學といふものは病氣から如何なる害が起るかといふことを敎へるので、夫より以上の事は敎へない。衞生の法則は積極であつて病理學は其消極である。而して衞生の法則は唯だ觀察と經驗とに依てのみ知らるゝのである。如何すれば健康が保たれるか又た本の通りに恢復されるか、其法を我々に敎へるものは觀察と經驗よりも外は無いのである。然るに內科は病を治す方法だと思ふ人が屢ばあるが決して左樣ではない。通例の外科術が手や足や其他の機關の外科術である如く內科は言はゞ身體の諸の作用の外科術である。而して何方も唯だ障礙となる者を取除ける迄の役目で、其外の事は何も出來ぬ。短く言へば何方も病を治す力は無い。唯だ之を治すのは造物の力のみである。例へば外科術では手又は足に埋まつて居る彈丸が邪魔物であるからといふので之を剔り出すのであるが、其後は外科術も手を拱いて唯造物の力が傷口を療すのを見物して居るのである。內科でも矢張其通りで、例へば胃とか腸とかの作用が歪ふて障礙が起つ

たとする。內科は早速造物を助けて其障礙を除去るが、夫より以上の事は何も出來ぬ。では此二つの場合に看護法は如何なる役を勤めるべきかといふに、造物の力が十分効驗を現はすことの出來る樣に患者を整へるのである。然るに世間普通の行方を見ると正しく此反對をして居る。即ち造物の力が成るべく効驗を現はさない鹽梅式に患者へ持掛て居る。何故といふに新鮮な空氣であるとか閑靜であるとか清潔であるとかいふものを非常な贅澤物、危險な贅澤物の如くに考へ、十分都合の善い時丈け少しぐらゐ病人に與へても善いと思ふて居る。而して藥は如何かといふと、是さへあらば千病萬病皆療ると考へて居る。若し私の望んで居る通り聊かたりとも首尾よく世人の此迷信を破ることが出來て、眞實の看護とは如何する事か、贋の看護とは如何する事かを一般の人に示せたならば、夫で私の目的は達したといふものである。

此次は用心すべき事を述てお終にする。

第三、用心

女を良い看護婦にするのは困難がない、失戀をしたとか、何か目的が達せられなかつたとか、世の中の事が皆厭になつたとか、看護より他の事をする器量がないとか、此中何か一つさへあつたら何の女でも良い看護婦になれると、是は一般に男が信じて居る所で、女ですらも矢張此考を持て居るらしい。

之を聞くと或る所に愚かな老爺があつてモウ豕の番が出來ぬ樣になつたといふ譯で小學校の先生にせられたといふ話を思ひ出す。

今述べた樣な了見で良い看護婦を育上げようなどとは大きな誤で、良い下女を育上げようとしてさへ此了見ではダメである。

然るに近來人氣の善い小說家が飛でもない妙な趣向を思付いた、戀の遂られなんだ孃や世間慣れぬ箱入娘が戰で傷を受けた我が戀人を搜す爲め戰時病院の看護婦になる、幸にして憧るゝ人に廻合へば案に違はず直に其蹤を追ふて暇乞をするといふ段取である。看護婦を斯く安つぽく書きながら此小說家等は此類の莫連女を惡く見て居ない。却て之を賞て看護婦仲間の女丈夫として居る。

此の如きヤクザな小説家は別として。一角慈悲深い男女の人でさへ時々甚だしい誤つた意見を抱いて居る。勿論斯る人達は看護の事について片破も知ないのであるが、自分では十分知た樣に思ふて居る。

今病院に在て一つの大きな病室を毎日甘く處置して行かうと思へば、人の生き死にするのが如何なる規則によるか、病室を人の健康に適する樣にする規則は如何であるかを知らねばならぬ（病院が健康に適するか否やは主に看護婦が箇樣な事柄を知ると知らぬとに由るのである）此樣な事柄は種々他の技術と同樣に經驗と注意深い穿鑿とを以て學ばねばならぬ。此通り六かしい必要な事は失戀の戯者や生活の途が無い辛さまぎれに如何な苦しい事でも厭はぬといふ樣な者に夢の御告で一夜に解る事でない。此樣な狼藉千萬な了見を抱いて居るから病人が受けた害は實に恐ろしいものである。此點に至つては天主教の諸國は譯が違ふ。書物を著す人も看護に從事する人も實際の行爲は兎に角理論の上では遙かに我々英國人の上手である。其國々では今言ふた類の婦人が發心して婦人慈善會などへ這入るなんどは思ひも寄らぬ所て、失戀したとか食ふに困るとか云ふより外に立派な理由のない志願者は長老が之を拒んて入れなんだ例が澤山ある。

天主教國で右樣の會へ首を突込まうとすると嚴重な誓を立てなければならぬ。我英國などでは看護婦になるのに一つも誓なんかいふ面倒な事をせぬから、誠に賴ない樣である。併しながら何んても技術を學ぶのには眞實の精神が大切である。殊に看護なぞは慈善的の技術で、之を眞面目に學ぶには眞實の精神の大切なること固より論が無い。眞實の精神が鐵石の如くである以上は、決して何が嫌ひ何が厭と云ふ樣な事のあるべき筈はない、その證據を立てるのに誓も何も要たものではないと思ふ。慈善とは我々人間仲間を愛する至情から出る事で、看護も其中の一つであるが、此博愛といふ結構な事をするのに誓をさせるのは、博愛を安つぽく見くびるといふものである。其樣な事を佛國の「ボルト、ロワイヤル」會の「メール、アンゼリック」と言はれた婦人や我

英國の「フライ」夫人（名は「エリザベス」、「フレンヅ」教會に有名なる慈善家、千八百四十五年に死んだ）の樣に慈善事業に名高い人々に聞かせたら何と言ふたてあらうか。

（註）今日何處にも行はれて居る二三の寢言がある。何卒我々の姉妹どもが其樣な愚說に傳染せぬ樣にして貰いたい。其一つは「婦人の權利」に關係した說で、男のする事なら醫業でも何でも皆女に出來る。縱ひ夫が女の技量に合ふ一番善い事てあらうがあるまいが一切頓着なしに爲るが善いといふて女に勸めるのである。又も一つは男の爲る事なら何に限らず眞似してはならぬと女に勸めるので、何故かと言へば男は男、女は女であるから女たる者は女としての義務は何であるかと考へねばならぬ。且又何々は女のする事、何々は男のする事、是々は女の宜く爲すべからざる事と極つて居るからだといふ。皆此樣な詰らぬ理窟で其外少しても氣の利た論は何にもない。人が幾ら此樣な事を絕叫立てゝも女は宜く之に耳を留めず、縱ひ何事であらうとも自分の最も長じて居る得意の事を利用して神の造り給ふた世界の利益となる事に盡さねばならぬ。前の二つの說は何れも皆宜くない、人の口の端に乘つてはならぬ。我より外の聲に耳を寄せるてない。或る賢い人の言ふた通り外から來た聲に耳を寄せる人て大事業や有益な事業を遂げた者はない。

婦人は自から有益と思込だ事をするに當て「女にしては實に驚いた」と言はれる樣な成績を擧げねばならぬことはない。又「女に相適しくない事てあるから其樣な事を爲てはならぬのに」なんぞ言はれた爲め有益と知りつゝ手を引込るのは詰らぬ。要するに苟にも有益な事てある以上は、夫が女に相應しようが相應しまいが、兎にも角にも之を行はなければならぬ。

女の身て此樣な事が出來るとは感心至極だと言はれたからとて必らず其事が有益になる譯てない。又女の力て出來るには出來たが、之を男にさせたら一層善かつ

たにと言はれたればとて其成績の價値が下る譯でもない。要するところ義に示した樣な愚說を顧みず、誠心誠意を以て驀々地に神の事業に向ふて馳進むの一事あるのみてある。

附錄

甲表　英國て看護婦として用ひられたる女の數

	合計	五歳以下	五歳以上	十歳以上	十五歳以上	二十歳以上	廿五歳以上	三十歳以上	卅五歳以上	四十歳以上	四十五歳以上	五十歳以上	五十五歳以上	六十歳以上	六十五歳以上	七十歳以上	七十五歳以上	八十歳以上	八十五歳以上
專業ノ看護婦	二五、四六六	…	…	…	…	六二四	八一七	一、一一八	一、三五九	二、二三三	二、七四八	三、九八二	三、四五六	三、八二五	二、五四三	一、五六八	七四六	三一一	一四七
家事向ノ看護婦	三九、一三五	…	五〇八	七、二九	一〇、三五五	七、五三七	四、一七四	二、四九五	一、四六八	一、六八二	一、二〇六	一、一九六	八三三	七二三	三六九	二〇四	一〇一	二五	一六

乙表　二十歳以上の看護婦の各所に在る數

	英國及ビ近海諸島ニアル總數	「イングランド」及ビ「ウエールス」	「スコットランド」	英國近海ノ諸島	第一區 即「ロンドン」	第二區 即チ東南部	第三區 即チ中央部ノ南方	第四區 即チ東方諸郡	第五區 即チ南西諸郡	第六區 即チ中央ノ西方諸郡	第七區 即チ中央ノ北方諸郡	第八區 即チ西北諸郡	第九區 即チ「ヨークシヤー」	第十區 即チ北方諸郡	第十一區 即チ「モンマス」及ビ「ウエールス」
專業ノ看護婦	二五、四六六	二三、七五一	一、五四三	一七二	七、八〇七	二、八七八	二、二八六	二、四〇八	三、〇五五	一、三三五	一、〇〇三	九七〇	一、〇七四	四〇三	三四三
家事向ノ看護婦	二一、〇一四	一八、九四五	一、九二三	一五〇	五、〇六一	二、五二四	一、二五三	九五九	一、七三七	二、三八三	九五七	二、一三五	一、〇三四	四一〇	六一四

○英國で看護婦として用ひられる女の數について

千八百五十一年に(英國で)國勢調査が有た時、其報告に據ると看護婦を業とする者が二萬五千四百六十六人、家事向の務をする者が三萬九千百三十九人、產婆が二千八百二十二人であつた。其の夫々の年齡別は甲の表に示してある。乙の表は英國の各表に散ばつて居る數を示して居る。

甲の表を見ると妙な事がある。家事向に使はれて居る看護婦人三萬九千百三十九人の中一萬八千百二十二人、即ち半分近くまでは五歲以上二十歲までの女である。此仲間に入て居る女を躾けて其効力の益す著しくなる樣に働らかせ、成るべく澤山な人物を養成して眞實の衞生法を覺えさせるのは國家の大事業であらう。

兎に角立派な者を拵上げる材料は此通り何萬人か有るのである、之を用ふる結果病人の爲めになるか害になるかは二段として、此丈の數は兎に角看護婦に用ひられるのである。恐らくは醫學界の泰斗と言はれるべき一人が曾て私へ話した言葉に、病人を介抱させる爲め折々個人の家族へ看護婦を送るけれども唯だ害をする斗のことだと。將來は此の如くならぬ樣にしいたものである。

大體看護婦と言へば誰に限らず他人の身體を預つて其健康を引受る人の事である。だから此書物の中でも看護婦を職業にして居る者も左樣でない素人も區別なしに看護婦といふて居る。例へば病人を介抱する女や子供を護する保姆の數は右に示してあるが、此より外に朋友や親類の者で一時病人を預る人もあり、我子を世話する母親もある。此等も皆看護婦といふべき者である。そこで此樣に專門の職業として居ない看護婦でも矢張專門の看護婦と同じだけ衞生法を心得ておくべき次第だと思はれる。

又英國中には國民教育をする學校や其外の學校が到る所にあつて、其所には澤山な女教師も居るのである。して又此學校に學んで居る女生徒の中で將來母となる人もあれば甲の表に示した六萬四千六百人の仲間入をする者もあらうし、又此女教師の仲間になる人もあるのである。そこで衞生法の六かしい事は別として、責ては空氣を新鮮に

すること、清潔にすること、光線を入れることなど丈でも此澤山な連中に敎へたならば、將來子供が死んだり害毒が起るのを大に防げるではあるまいか。身體と家屋の衛生即ち今言ふた諸點に就て人間が墮落せない樣にする事に至つては、一から十まで婦人の力に依らねばならぬ。女の手次第で人間が惡くもなり又善くもなるのである。而して人間を健康にしておく技術を人に敎込まうと思へば、實際の物事と簡短な實驗とを以て學校や病院に居る女達に肝要な所丈を敎へるのが本當ではあるまいか。

看護の栞 終

大正二年五月廿二日印刷
大正二年五月廿五日發行

看護の栞
定價金五拾錢

譯者　東京市麹町區平河町四丁目六番地　岩井禎三

發行者　東京市芝區愛宕下町四丁目一番地　日本赤十字發行所

代表者　東京市京橋區築地二丁目廿一番地　橋本忠次郎

印刷者　東京市京橋區築地二丁目廿一番地　畑中爲之助

印刷所　國光印刷株式會社

發行所　東京芝區愛宕下町四丁目一番地（振替貯金口座壹壹七九番）　日本赤十字發行所

不許複製

ハエ2R-3

終